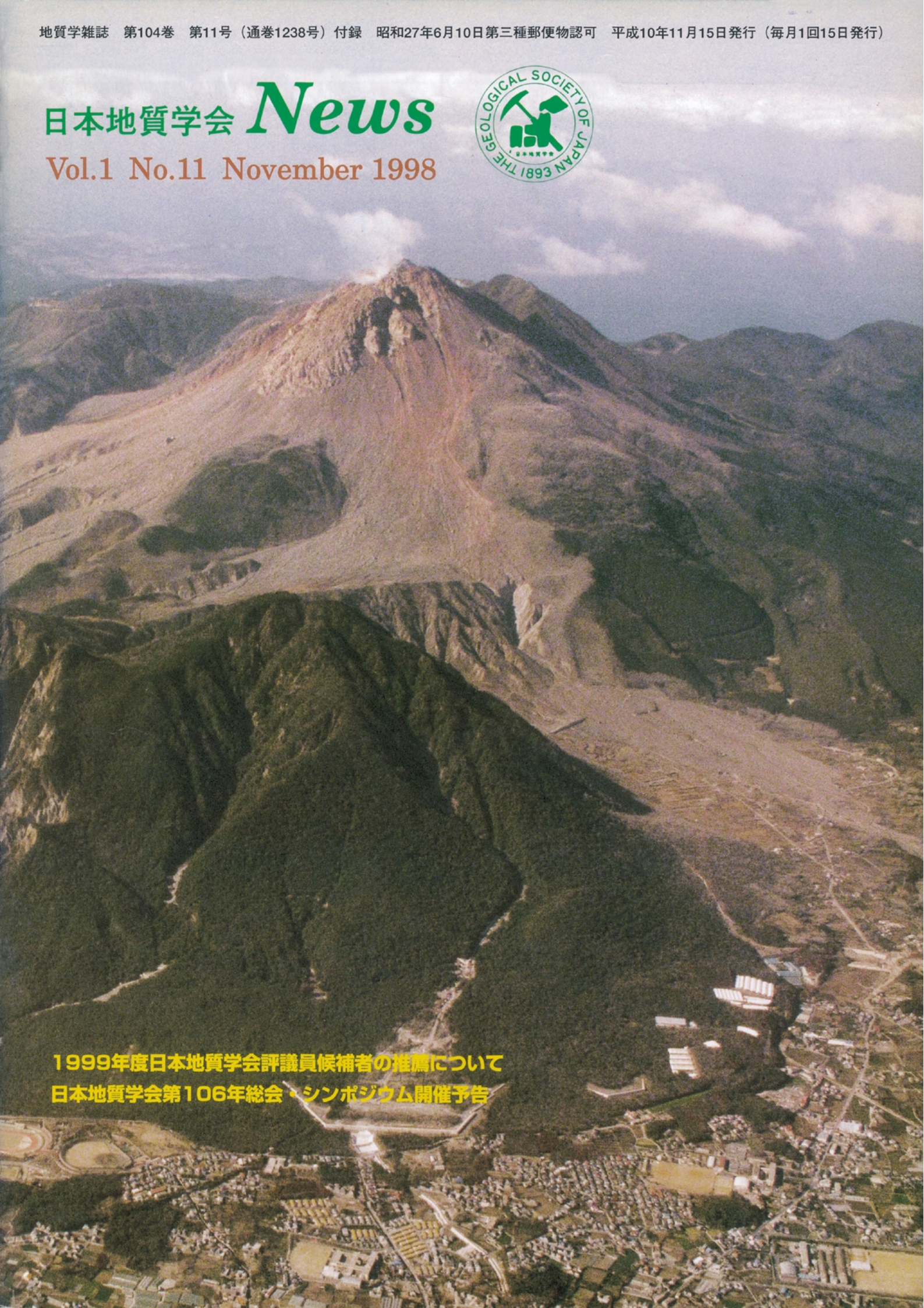
地質学雑誌　第104巻　第11号（通巻1238号）付録　昭和27年6月10日第三種郵便物認可　平成10年11月15日発行（毎月1回15日発行）

日本地質学会 News

Vol.1 No.11 November 1998



1999年度日本地質学会評議員候補者の推薦について

日本地質学会第106年総会・シンポジウム開催予告

1999年度日本地質学会評議員候補者の推薦について

会則第9条ならびに役員選挙細則に基づき，評議員候補者の推薦を受け付けます．受付期間は1998年12月1日（火）から12月20日（日）までとします．郵送でも持参でも結構です．ただし，ご持参の場合，土・日曜日は事務局は休業ですのでご注意ください．また，郵送の場合には，締め切り日の12月20日（日）必着とし，消印は認めません．

「推薦届」は下記の様式を参考に作成してください（用紙はA4判を横書使用）．推薦は正会員または院生会員2名以上の連署でお願いします．なお，候補者の承諾を確認するための署名を必ず付けてください．改選は，評議員25名です．

投票用紙と共に会員に送付する「役員候補者名簿」には候補者名と推薦者名，所属支部，所属（勤務先），専門は必ず記載されます．そのほか最終学歴，専門部会名（所属している場合のみ），立候補の抱負または推薦理由（100字以内）が記載されますが，推薦届にこれらの記載がない場合には役員候補者名簿に「記載なし」と明記します．立候補者および推薦者におかれましてはこれらのことをご留意のうえ，宜しくお願いいたします．

次の評議員の方々は1999年度も引き続いて任期がありますので，推薦されても無効です．

足立　勝治	足立　久男	赤羽　久忠	板谷　徹丸	磯﨑　行雄	永広　昌之	菊地　隆男
久保　和也	公文富士夫	熊井　久雄	小泉　格	小出　良幸	佐々木和彦	佐瀬　和義
柴　正博	柴﨑　直明	田崎　和江	高橋　正樹	高安　克己	徳橋　秀一	鳥海　光弘
新妻　信明	別所　孝範	真砂　英樹	吉田　武義			

（日本地質学会選挙委員会）

＜推薦届様式　例＞　　（A4判用紙）

1998年12月　日

日本地質学会
選挙委員会　御中

1999年度日本地質学会役員
候補者推薦届（承諾書付）

正会員・院生会員　　君を1999年度評議員候補者として推薦いたします．

1.　　印　　2.　　印

上記のとおり候補者として推薦を受けることを承諾いたします

候　補　者　　印

所属支部
所　　属
専　　門
最終学歴*
専門部会名*　所属（　　），所属なし
立候補の抱負または推薦理由*（100字以内）

連絡責任者（氏名・住所・電話番号）

（*記載のない場合は「役員候補者名簿」には“記載なし”と明記します）

会費払込ご案内

1999年分会費の納入期になりました．会則第6条により会費は前納することになっています．各会員宛に請求書（郵便振替用紙）をお送りしますので，早期納入にご協力下さい．会費額は，**正会員：**10,000**円**，**院生会員：**8,000**円**，**学生会員：**5,000**円**です（在外会員も同様）．

自動振込ご利用の方へ

「預金口座振替依頼書・自動振込利用申込書」を提出していただき，ご協力ありがとうございました．99年分の会費から引き落としをさせていただきます．なお，この場合，事務量の軽減と簡素化ため，請求書の発行を省略させていただきますのでご了承下さい．引き落とし日は12月24日，通帳には「チシツカイヒ」（金融機関によっては短縮されることもあります）と印字されることになっていますのでご承知おき下さい．

自動振込利用申込は引き続き募集中

現在のところ，たいへん残念ながら「預金口座振替依頼書・自動振込利用申込書」は，当初の目標の16％（約300人）ほどの提出しかありません．この制度は，一人でも多くの方にご利用いただくことでメリットが生じる仕組みになっていますので，会員各位には，ぜひご理解とご協力をお願いします．今後も期日に関わらず引き続き募集を継続してまいります．書式は機会あるごとにお届けしますが，とりあえずは今年のNews誌8，9，10月号にとじ込んでありますのでご利用下さい．

（日本地質学会会計委員会）

1999年の院生・学生会員の申請をお願いします！

院生会員，学生会員の種別は毎年ご本人の申請によって決められます（運営細則第10条第2項）．該当される方は下記の書式にしたがって，11月末日までにお出しくださるようお願いいたします．申請によって次年分の会費額が決まりますので，会費請求書の発行に間に合うよう，特に院生会員に該当される方は必ず申請してください．

なお，種別は毎年更新いたしますので，一度申請したことがある方も改めてご提出をお願いいたします．

（日本地質学会　会員係）

＊　下記の書式をハガキに貼って出してくださっても，FAXでもよろしいです．

院生・学生会員申請書

＊会員番号　□□□□□□□　宛名の右下の7桁の数字

＊氏　　名

＊1998年11月末現在（　　）大学，□　大学院生，　□　研究生，　□　学部生

但し，□　基本的に定期収入なし．
□　学術振興会，科学技術庁等からの奨励金を受けている．
□　会社，団体等に所属し，一定の収入を得ている．

＊1999年4月以降
□　これまでどおり在学．
□　学部からの大学院への進級予定，または決定．
□　3月にて卒業・修了予定．

＊その他の連絡事項

日本地質学会 *News* Vol.1 No.11 November 1998

The Geological Society of Japan *News* 日本地質学会／〒101-0044 東京都千代田区鍛冶町1-10-4 丸石ビル 編集委員長 高橋正樹
電話 03-3252-7242 Fax 03-5256-5676 E-mail : geosocjp@ra2.so-net.or.jp ホームページ http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/gsj/

Contents

巻頭

1999年度日本地質学会評議員候補者の推薦について
日本地質学会選挙委員会

会費払込のご案内（お願い）/1999年の院生・学生会員の申請をお願いします

ロンドン地質学会改革の進展
小松正幸……2–4

松本大会行事委員会報告
行事委員長 磯﨑行雄……5–6

日本地質学会第106年総会・シンポジウム開催予告……6

地学英語雑感⑨ パラフラフについて 嶋﨑吉彦……7

博物館紹介⑭ 穂別町立博物館 櫻井和彦……8–9

学協会・研究会報告……10–11
IGCP-368（東ゴンドワナの原生代事件）International Field Workshop「The Mozambique belt of Southeast Africa」参加報告 加納 隆

紹介……11–12
田口一雄：石油の成因－起源・移動・集積/日本応用地質学会関西支部＋関西地質調査業協会（共編）：丘陵地の地盤環境/寄贈本・紹介依頼本

ご案内……12–13
第2回国際土壌・地下水環境ワークショップ/第8回化石クニダリア海綿国際会議の御案内

公募……13
公募結果/東京大学地震研究所の教官の公募について/平成11年度京都大学防災研究所共同研究の公募/1999年スミソニアン・フェローシップの募集

委員会報告……14
1998年IGC理事会報告

専門部会コーナー……15–16
火山部会：1998松本大会議事録/岩石部会：松本大会 ランチョンの報告/情報地質部会：松本大会 ランチョン報告

支部コーナー……16
東北支部：総会，火山・地震学術シンポジウム［岩手山の火山活動と防災］岩手ネットワークシステム「地盤と防災研究会」と共催

院生コーナー……17–18
アンケートに答えて下さい（12月10日まで）/
研究室紹介 No. 4 大阪市立大学理学研究科地球史研究室

学会記事……19–20

1998年度臨時評議員会議事抄録

執行委員会だより……20

1998年度第3回定例評議員会のお知らせ……20

The Island Arcだより……21

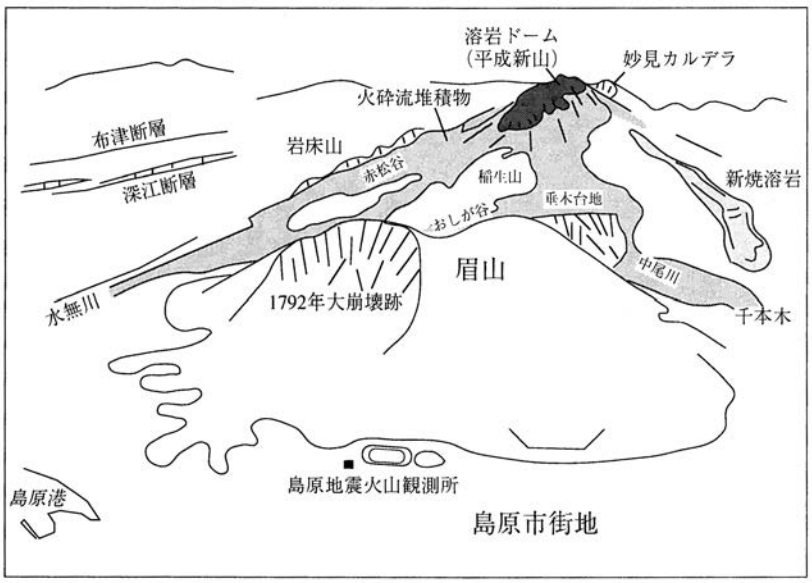
カレンダー……22

出版物在庫案内……23

取扱い地質図一覧……24

表紙解説

その後の雲仙普賢岳



雲仙普賢岳は1995年の始めに噴火活動を終えた．4年あまりに渡る噴火活動では溶岩ドームの崩落によって火砕流が数多く発生し，外国の火山学者を含む多数の犠牲者が出た．現在は，火砕流堆積物が水無川流域と中尾川流域に広く分布している．島原市街地の背後にある眉山は，今回は市街地を火砕流から守ったが，1792年には大災害を引き起こした．新焼溶岩が流れた直後，眉山が地震に誘発されて大崩壊し，その崩壊物は有明海になだれ込んで津波を引き起こした．その結果，島原・肥後地域で約1500名も犠牲になった．その時の崩落崖が山肌に残り，流山が海岸付近に点在している．

現在，水無川，中尾川，おしが谷の下流では，砂防工事が急ピッチで進められている．また，草木の種の空中散布によって，火砕流堆積物上には人工の緑が回復してきた．溶岩ドームはまだ高温の噴気を出しており，自重によってゆっくり変形し続けている．（1995年2月16日自衛隊ヘリから撮影）

（東京大学地震研究所 中田節也）

表紙デザイン：渡部芳夫 レイアウト：村松雅子

ロンドン地質学会改革の進展

小松正幸

ロンドン地質学会は1993年以来，地質学会の執行体制の改革に取り組み，今日までまだ議論が続いている．このプロセスについては植村元会長が学会ニュース誌2月号に紹介され，元地質学会会長の諸先輩からロンドン地質学会の運営を学べというご忠告も受けた（地質学会ニュース誌，9月号）．そこで，私はその改革の背景やプロセスをもっと詳しく知り学ぶために，93年以降の***Geoscientist***（ロンドン地質学会のニュース広報誌）をつぶさに調べてみた．また，たまたま訪れた英国人地質学者A. J. Barber氏（かって同学会の評議員）にも不明な点を聞き，事務局にも問い合わせた．ロンドン地質学会の改革の動向はわれわれにとっても貴重な教訓となるものであるので以下に紹介する．

組織運営に関する緊急通知（Governance–Urgent Notice，1997.11）はなぜ出されたか

ロンドン地質学会はイギリス地質屋の誇りであり，常に世界の地球科学をリードし，国内にあっては政府，関連会社，教育機関の必須のアドバイザーの役割を果たしてきた．近年，斯界のpowerとactivityにおいてアメリカ地質学会には及ばないにしても，依然としてその権威と重要性に変わりはない．その学会もいま重大な局面にあり，執行部は21世紀に学会を発展させるためには学会の組織体制，運営システムの改革をぜひともしなくてはならないと考え，その方策を提案し一部は実行してきた．多くの会員（関心ある）は改革の必要性を認めてつつも，その進め方に一時は強い反発があり，激しい議論があった．

植村　武氏のロンドン地質学会の動向（ニュース誌2月号）に1997年11月に出された上記緊急通知が紹介されているが，実はこれは突如だされたもので，その前に複雑な経緯がある．

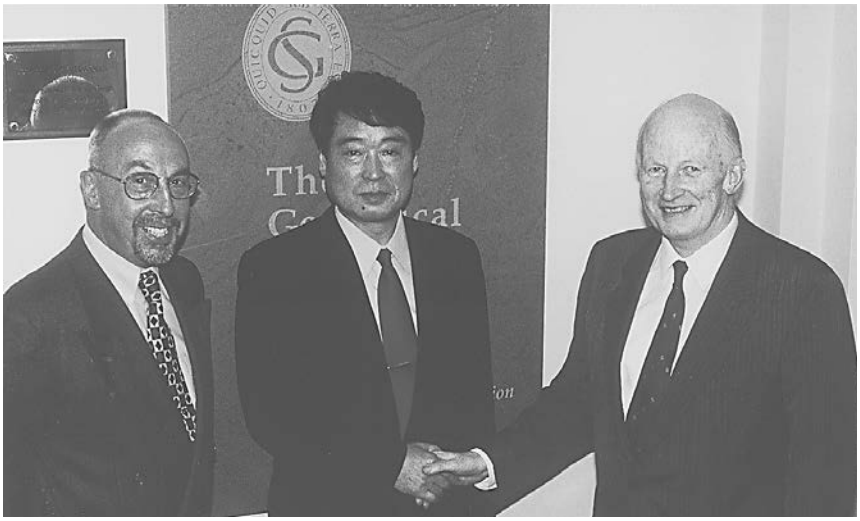
97年2月広報誌*Geoscientist*（7–2）に‘新しい’地質学会事務局長（Executive Secretary）採用募集の公告が掲載された．‘新しい’というのは意味がある．これより先き，96年12月に評議員会は学会の組織運営に関する副会長委員会の報告を受け，その主要な内容を承認したが，その一つに事務局長を新しい人に代える，という提言があった．事務局長は33名の事務局員を統括するばかりでなく，学会のあらゆる集会や国際集会をアレンジし，学会内外の諸事に対応する重要な職員である．これまではR. Batemanという人が1980年から17年間勤めていたが，彼は地質屋ではなかった．副会長報告は事務局長を地質学にも事務処理にも精通した経験ある地質屋に代え，「高いレベルで地質学会を代表し，政府や企業など学会外の機関やメデイアに対応できる」ようにすることを提言した．この報告提言は学会の運営組織体制全般の改革を含んでいるもので，97年1月の評議員会で正式に承認され，その中の事務局長の解雇交代は直ちに実行に移された．この1月評議員会で承認された組織運営体制の改善報告（Governance Repart）は4月になってやっとその概要が広報誌に報告され，本報告は事務局に申し込めば手に入ることが知らされた（*Geoscientist* 7–4）．これに対して会員からの賛否両論の投書が4月号から続々と現れはじめた．これは事務局長の更迭のみならず，組織改革全般に対する議論として行われたが，改革の動きが始まった93年以降，このような激しい議論が起こったのは始めてである．しかし，事務局員の雇用は評議員会の権限であるので，事務局長の解雇，新事務局長の採用は予定どおり行われ，7月30日にはさよならパーテイーがあり，感謝の言葉とともにその記念写真が9月号に掲載された．新しい事務局長（E. Nickless）は地質調査所およびNERC（自然科学系の学審に相当する）を勤めた地質屋で学会公認の地質屋（Chartered geologist；技術士に相当）である．

これと平行して評議員会は組織運営体制の改革案（規約改正を含む）を提案する特別総会を6月に開くことを決めた．そして，事前の説明と意見聴取のために5月に特別総会を開くことを決め，それらの通知が出されている（*Geoscientist* 7–4）．6月の総会には規約改正案の投票を提案したが，投票は延期された．その理由は1）多くの会員は基本方針はよいが，説明が不十分と感じている，2）事前にも総会においても充分議論する時間がなかった，ことにある（会長，Hardmanの総括；*Geoscientist* 7–8）．6月総会出席者は5月総会に出ておらず，始めて説明を聴く人がほとんどであった．評議員会は次の特別総会を11月に開きこの問題に決着をつけるつもりであった．しかし，その後の評議員会の議論によって当初の規約改正案を取り下げ，別の提案をすることを決めた（*Geoscientist* 7–10）．それが緊急通知（Urgent Notice）として*Geoscientist* 11月号に別冊として挟み込んで送られたのである．ここでは今後，規約には手を付けず改革は慎重に行うことが表明され，規約全般を見直す委員会を新たに設置することなった（植村氏の報告；地質学会ニュース誌2月号参照）．しかし，新提案を巡ってまた問題がおこった．新提案の内容と問題については後で述べることにし，イギリス地質学会がなぜこれまでして改革をしようとしているのか，を紹介する．

なぜ改革が必要か

学会の改革の動きは1993年に始まったが，それ以前にその必要性は認識されていた．評議員会はこれに対する会員の意向を聴くためにアンケートを行った．もちろんこのアンケートは漠然とした質問ではなく，改革の方向と提案を含み，それに対する意見を問うものであった．回答は‘意外にも’会員の3分の1から寄せられ，関心の高さをうかがわせるものであった．ちなみに，会員の大多数は学会運営には無関心で，評議員候補の予備投票数は6,000人の英国在住会員のうちたったの500前後である．規約（Bye–laws）によれば，総会（特別総会を含め）は11人以上の会員がいれば成立する（委任状の規定はない）．

93年から94年にかけてこのアンケートの結果に基づいて今後の改革方向の議論が評議員会をはじめ様々な委員会で行われ，これらに基づいて学会運営体制，事務局体制の改革案を検討するための委員会（Organization Review Committee）を発足させた．94年3月の特別総会に改革のための議論の骨子が提出され，94年10月の評議員会に委員会報告書（61頁の分量，60の提言）が提出され,評議員会で承認された．会長（Prof. S. Sparks）によるその解



ロンドン地質学会訪問を記念して．右からDr. Robin Cocks（会長），小松，Mr. Edmund Nickless（事務局長）．撮影Dr. Ted Nield（事務局科学およびコミニュケーション担当）

説と要旨は95年4月に報告されている（*Geoscientist* 5–2）．ここには地質学会の現状認識とその後の組織運営改革の基本となる指針が出されている．

よく知られているように，ロンドン地質学会は1807年に創設された世界最古の地質学会で，1825年には国王公認学会（Chartered Learned Society）となり，1874年には政府から事務所を与えられ，現在のPiccadillyにあるBurlington Houseに本拠を構えた．現在，会員数は9,000を越え，内6,000余が英国在住者である．会費は英国会員£83（約2万円）であるが，会費は全収入の24％に過ぎず，出版収入41％，投資益や寄付15％などとなっている．約10年ほど前に作られ出版局Publishing Houseは大成功を納め，いまでは地球科学関係の世界的出版社になり，莫大な収入を上げている．事務局職員は33人（内Publishing House職員11人）が雇われている．

学会の活動は22の専門グループ（Specialist Group），14の地域グループ（Regional Group）が行う国内・国際集会の開催，各種の総会やシンポジウム，出版，大学の学位評価，Chartered geologistの認定，会員サービス（とくに図書や地質図の貸し出し，コピーは非常に充実）などの他に，地学教育の向上活動，環境地質学，土木地質学の発展と地位向上，対外的対応（地質学に関連する問題についての政府諮問・相談への助言，企業への助言，メディアへの対応）など多岐にわたり，さらに，会長はじめ執行委員や評議員は18～20の常置委員会（Standing Committee），事務局の管理運営，対外対応など，極めて多面的で重要な任務が課せられている．これらの活動や任務は今後ますます多様化し重くなることが予想され，旧来の体制ではこれらに対応できなくなる．97年4月以降，会員からの執行部批判が強まる中で，Hardman会長は改革の必要性を再三*Geoscientist*誌上で訴えているが，彼等が事務局員にプロの地質屋を入れることにこだわる理由は役員の仕事が過重すぎることにある．会長，副会長（5人），執行委員（6人）は学会の仕事に週3日も取られる．それぞれは自分の職場があり，重要な位置を占めているので，誰も学会のボランテイア活動に自由に時間を費やせる人はいない．だから，事務局員のレベルを上げ，とくに事務局長を地質学（界）も分かる人にして，会長や評議員会のコントロールのもとで，学会の前面にでて活動してもらうことが必要である．このままの状態では役員は退職した人か退職間近い人になってもらうより方法が無い．同時に，多数ある常置委員会を統合整理し，委員会に事務局員をnon–voting memberとして参加させる．会長はじめ執行委員，評議員には委員会旅費，宿泊費，食費が支給されるが，その費用も莫大であり，経費の削減が必要．

改革の中には，学会の目的（Charterにはinvestigating the mineral structure of the Earth in the public interestと書かれている．Charter（憲章）は会則に相当するもので，英国王侯貴族制に相応しく古色蒼然たるものである）を実態にあうように規定すること，会長や役員，評議員候補の選出をもっとオープンにして会員が参画できるようにする，会長はアカデミー分野だけでなく会社や政府機関の会員も選ぶようにする，なども含まれており，学会の近代化の必要性が訴えられている．ちなみに，ロンドン地質学会では，つぎの会長（任期2年）は現会長，3人の直近の前～元会長，評議員2人の委員会によって評議員会にノミネートされる．副会長（評議員でなくてもよい）は会長指名．執行委員は会長と評議員2人，現執行委員からなる委員会でノミネートし評議員会に提出する．評議員は23名，任期3年で，会長などの役員とともに年次総会で投票により選挙されるが，評議員候補はその前に候補者を会員から推薦させ通信投票で予備選を行い，空いている席の数だけに候補を絞る．役員候補はすでに評議員会でノミネートされたものが提案される．このシステムは決して民主的とは言い難いが，これで充分に学会活動は機能し，会員は満足してきた．しかし，今や会員の60％以上は企業の技術者であり，教育機関（小中高の教師会員は極めて小数）は13％程度に過ぎない．したがって，大学関係者だけで内々に役員を順繰りに決めるやり方に不満がでるのは当然で，それが無関心や大学の新規卒業生が会員にならない，という現象として現れていると見てよい．96～98年度の会長，Hardmanは始めて民間企業から就任した．

規約改正案は承認された

97年11月，緊急通知を出し11月10日特別総会で新しい提案を行ったことはすでに述べた．この提案に先立って評議員会は会則と規約（Charter and Bye–laws）の全面的見直しを行う小委員会を設置し，99年9月までに報告をまとめてもらうことを決めた．これまで長い間，その時々に規約の小改正を行って済ませてきたが，実際には矛盾だらけであり，規約違反も多々あることが分かったので，この際，小改正は止めて全面的に見直しを行おうというものである．この作業は大変難儀なもので，どうしても時間がかかってしまう．しかし，組織体制を規約改正が決まるまで放置しておく訳にはいかないので，現行の規約の下で常置委員会に代わる5つの局（Board）体制を導入し，このシステムが良いかどうかを試し，その経験を規約改正小委員会に申し送ることにする，という提案をした．5つのBoardは，Management and Finance, Science, Professional, External Relations, Publicationsである．各Boardは会長または執行委員が委員長になり，評議員とそれ以外の会員，投票権のないアドバイザーとして事務局長と事務局員数人によって構成される．

11月10日の特別総会ではこの提案に対して，Management（運営）とFinance（財政）を一緒にするのは規約違反ではないか，という疑義が出された．一方，この提案を全面的に受け入れて投票に付すべき，という動議が提出された．しかし，この動議に対して投票は延期すべき，という意見があり，結局投票は持ち越された．というのは，投票の提案に対して2人以上の

出席者（会員）の延期要請があれば，投票は次の総会まで延期することが規約で定められているからである．

12月の評議員会は総会で出された規約違反の疑義について議論し，執行部はさらに弁護士に会則・規約と現在の組織運営の実体について相談した．その結果，「驚くべき」回答を得た．現在ある常置委員会（97年段階では18）のうち規約に適合しているのは6つであり，後の12は規約違反だという(Hardman, *Geoscientist* 8–1)．中でもLibrary Committeeなどは100年前から存在しているものである．会の運営上必要な委員会は慣例として設置してきたのであり，それに対して疑義がだされることは従来はなかった．総会の議事進行や役員選挙は規約に照らして極めて厳格に運営されているが，常置委員会については‘柔軟に’対応してきたし，出版社Publishing Houseを設置するなど，会員サービスの向上や財政上の利益が優先されている．

とはいっても，規約違反をくり返す訳には行かないので，11月の提案を再び修正（変更）して，新しいBoard Structureを導入するためにはやはり規約改正が必要である（*Geoscientist* 8–1)，ということになって急遽4月の学術大会（キール大学）に合わせて規約改正のための特別総会を開催することを2月評議員会で決め，3月に予告が出された（*Geoscientist* 8–3)．この規約改正は委員会名をきっちり決めている現行の条項を廃し，必要に応じて局（Board）や委員会（Committee)，作業委員会をつくることができるようにすること，総会で会員が要求した場合に委員会を設置できるようにすること，の2点についてのみ諮られた．4月総会の結果，規約改正は承認され，5つのBoardができた（*Geoscientist* 9–9)．しかし，改革はまだ序の口である．

ロンドン地質学会の将来像―改革の背景

あと10年足らずで創立200年を迎える，世界をリードしてきたロンドン地質学会はその活動，財政規模，権威，社会的地位と役割においてわが地質学会とは比較にならない高いレベルにあるが，かって経験したことのない国際社会の転機にあって，地質学会は21世紀にどうあるべきか，が共通の課題として問い掛けられている．イギリスにおいても地質学会は学者の学会から地質学に関連する技術者の学会に変わりつつあり，その分野も地質災害，地球環境，都市地質，建設に関連する土木地質学が主要になることは自明といってよい．会員サービスの内容も変化し，多様化している．学会活動が多面的に，その社会的責任が重くなればなるほど過重な責任と仕事が執行部にかぶさる．この状態を改善するには運営組織のリストラ合理化と，パーマネントスタッフにプロの地質屋（現在職員の中に地質屋は4名）を入れて肩代わりをしてもらうことが必要である．これが現時点におけるロンドン地質学会改革の焦点である．

他所の学会のやり方について深入りした論評は差控えたいが，この数年提案を出したり引っ込めたり，提案をクルクル代えてきた執行部の様はわれわれから見れば意外（異様）であり，混乱しているとしか思えない．しかし，学会というのは運営のプロがやっている訳ではないので，どこでもこんなものであろう，という変な安心感と連帯感を覚える．それにしても，かってない議論の沸騰している中にあって，この改革議論に関心をもち参加している会員がいかに少ないかも意外なことである．

通常においては学会運営に疑義を唱える人は*Geoscientist*の投書欄をみる限りほとんどいない．学会運営は多数のスタッフに支えられているお陰もあって，執行部に対する不満はあってもそれを凌ぐ信頼感がある．これが学会という組織を支える民主主義の基本であると思う．しかし，いざ大改革となると議論が巻き起こる．改革に対してはこれを引き戻そうという部分がでるのは必然であり，それを恐れていては前進はない．ロンドン地質学会執行部は紆余曲折を経ながら強力に改革を押し通してきた．そこには学会の地位を維持し新しい情勢に対応して発展させるためにはそれが必要であるという強い信念があり，それを実現されるためには批判や論争を避けず，何回でも総会（たとえ出席者は少数であっても）を行って論議をくり返す粘り強さがある．これが民主主義というものであろう．われわれの学ぶべき教訓は多い．（1998.7.3）

追記　6月の評議員会においてこの一部を紹介したが，文書なしにお話したために，不本意ながら批判のための紹介という誤解を与え，一部の方には不快な印象を与える結果になってしまった．上記の内容を読んでいただければ私の本意をご理解いただけるものと信ずる．

なお，本年8月渡英の際，ロンドン地質学会事務局を訪問し，会長・事務局長と懇談する機会をもった（写真）．この際にも改革の動向と今後の方向についての見解をお聞きすることができたが，高いレベルで学会の地位を維持する自信と，会員サービスを柱とする細心の運営に苦心されている様子に感銘を受けた．

日本地質学会ニュース読者の皆さまへ

日本地質学会*News*をご覧いただいた皆さまのご意見をお待ちしております．日本地質学会ニュース誌委員会宛に，ニュース誌でお読みになりたい情報や記事などのご要望，掲載記事や企画へのご意見など，ファックス・電子メールでお送りください．また，ニュース誌の表紙を飾る地球科学的な写真，種々な原稿のご投稿もお待ちしています．

日本地質学会ニュース誌編集委員会　Fax : 03–5256–5676　E–mail : geosocjp@ra2.so–net.or.jp

松本大会行事委員会報告

行事委員長　磯﨑行雄

松本大会で開催された個人講演セッションについて以下に報告する．本年度は長年続いてきた講演セッションの設定方法を変更したため，一部の会員からの不安の声もきかれた（ニューズ誌7号14頁）が，本年度の行事委員会で慎重に議論し，実施にこぎつけた．プログラム作成は，もともと在京委員によるボランティア仕事（会議参集のための旅費・謝礼一切なし）として行われてきたものであり，特に今回は新システムでのセッション数増加によって，実質的に例年の2倍以上のの労力をついやせざるを得なかった．御努力下さった行事委員各位ならびに事務局の方々にこの場をかりて深く感謝したい．また各セッションの世話人各位および開催校の信州大学準備委員会の方々にもこの場をお借りして御礼申し上げる．

臨時行事委員会での報告

松本大会の最終日夕方に臨時行事委員会をひらき，今回のまとめと反省を行った．各委員が会期中に耳にした感想などが紹介され，意見を交換した．以下はその概要である．

セッション形式：好評だった．聞きたいテーマが選びやすかった．シンポを無くして，3日間個人講演のみとしたため時間的ゆとりがあった．セッション区分が今後，頻繁に変わるのは困る．ある程度の固定セッションも必要．セッションの日程が重複しすぎた．セッションの方式を変えるときは評議員会か総会で議論してはどうか．

セッションの類似・相違：部会や行事委員会での調整が必要（環境（地震）・テクトニクス・活構造，火山部会と岩石部会での重複など）．セッションを細かくくくりすぎ．セッションの選択を誤ったと判断した人が多い（こんな学会ではもう講演したくないので，今後は地球惑星合同学会で講演する！という人もいた）．一方，受け皿がなかったため今回講演を取り止めた人もいる（応用地質，花崗岩など）．地学教育と地学史は別物で，一緒にするべからず．一部には同好会的雰囲気のものもあり，学問の場としての緊張感に欠ける．

招待講演：うまく客寄せに作用した．招待講演の時間が短かすぎる．時間配分などで，コンビーナーの裁量自由度を増やして欲しい．招待講演数の決め方などまだオーラル中心，もっとポスターへ．旅費など出していないので，招待講演という呼び名はやめて基調講演にしたほうがよい．

ポスター：コアタイム好評，時間はもっと長い方がよい．コアタイムと口頭紹介をわけたことが良かった．展示場所が狭く，時間とスペースにゆとりが欲しかった．

プログラム：見にくかった．セッション順ではなく，合同学会のもののように（TV番組表のように）日程順にして欲しい．発表者の索引が欲しい．ポスターだけのプログラムが欲しい．そのためにはプログラム表作成専門の人員・予算が別途必要．

その他：地調による「ザ・フォッサマグナ」展示・配付物（色刷りポスターなど）は好評であった．座長が講演時間を守らせていない（古領家など）．合同学会では来年から講演要旨集の印刷を廃止して，全要旨を入れたコンパクトディスク1枚を配布することが決まった．地質学会でも，将来的には，講演申し込みや要旨集の電子化はさけて通れない問題であることを認識する必要あり．

各セッションの報告・寸評

次に各セッションの世話人の方々による報告・寸評を示す．世話人自身の評価ゆえに手前味噌の部分があるかもしれない．そういった点も含めて，今後の方策を探るうえで参考になると考え，以下に列挙する．

国内地質：地域層序との棲み分けに難．趣旨がやや理解されず．

海外地質：聴衆極少無念，地域地質＝国内・海外不可分，セッション細分反対．

フォッサ：参加者多数．新しいデータの提示による研究の新展開に議論百出．

地域層序：列島南北の地質区を考慮して30以上の講演．ポスター紹介好評．

広域層序：種々の分野の話題があり好評．地域層序との区分に曖昧さあり．

層序復元：スムースに進行．アットホームな会場．区分に試行錯誤が必要．

砕屑物組成：明確な課題ごとに講演が集中し，議論ができた．好評．

炭酸塩岩：広範な炭酸塩地質学をカバー．全体に好評．ポスター強化必要．

炭酸塩化学：環境変動解析での炭酸塩地球化学の有用性の再確認．質疑活発．

有機地質：内容豊富．招待講演時間が短い．地質学論集として纏めたい．

シーケンス：内容充実．時間超過多い．本区分は今後固定化すべき．

堆積相：関連する発表，ポスター説明好評．堆積相とテクトニクスの要望あり．

珪質・続成：話題は分散．発表機会の拡張は有意義．時間帯重なりに不満有．

堆積過程：好評.来年度以降も持ちたい.ポスター説明好評.他との時間調整良.

海洋地質：話題多岐．ポスター盛況．海洋地質大くくり区分は好評．

テクトニクス：発表内容にまとまり．参加者多く，活発な討論．時間超過多い．

活構造：関連テーマ「活断層」は同日に．別日だと両方への出席は困難．

沈込帯の計測：計測・観測手法に注目した新提案は成功．少講演数にしては盛会．

付加体：おおむね良好．関連セッションとの統合・分割，進行の調整必要．

断層岩：野島断層関連の講演多．区分に不満有り．時間はぴったり．

岩石変形：若手の発表多し．本セッションは定着可．目的のアピール必要．

動的岩石学：約50名出席，盛況．テーマをシャープにする必要あり．

地質と地震：テーマのカバー範囲が狭かった．「活構造」との調整必要．

火山噴火：最近の火山噴出物の諸性質に基づく多様な発表・活発な討議があった．

火山地質：招待講演がうまく機能．議論多い．進行順調．火山関係細分しすぎ．

火山深成岩：招待講演好評．ほぼ時間どおり進行．区分に不満無し．

マグマ：かつてない多分野の講演．招待講演時間不足．下部地殻との重複不満．

火山テクト：招待講演および一般講演がうまく噛み合い，成功だった．

下部地殻：マントル関連優勢．討論時間に余裕なし．関連セッションと並行．

変成テクト：立見客など活気あり．変化に富む内容．若手は真剣．司会上手．

古領家：年代論に議論集中．他との重複で午後参加者激減，時間超過要反省．

プレート深部：多数来聴．会場手狭．招待講演好評．類似セッションと要調整．

オフィオ岩：多様な話題，盛況．海台玄武岩の認定基準に議論集中．

超高温変成岩：若手参加多く将来へ好発進，招待講演のレビュー適切．

情報地質：GIS・DB・3DのPCデモ好評，ネットワーク実現次回も期待．

太平洋新生代：招待講演・全体的好評，講演時間不足，全体討論20分追加要求．

ヒマラヤ：自由型セッション設定歓迎．従来型講演・シンポとの日程調整必要．

超大陸：目的明確で多分野・多数の人が参加，質疑は活発．今後も本方式は推薦．

環境修復：15発表，参加50名，好評．ポスター狭く暑い．招待講演短かすぎる．

水文都市：環境としての地層・地下水に関心高い．全体運営・区分に不満．

地震災害：様々な研究手法の講演多し．好評．区分・全体編成に不満あり．

人間社会：発表多様.地質学と人間の関わり視点重要再確認.セッション制疑問．

脊椎動物：参加人数は従来と変化無し．学生など若者の参加多かった．

中生化石：概ね好評．ポスター2分紹介に演者，係とも当惑．ブース間隔狭い．

新生化石：招待講演好評．時間超過多い．他と時間重複．部屋狭い．

地学教育普及：地学史と教育は別物．現場の苦労の理解が学会・大学で必要．

岩盤崩落崩壊：参加者65名．招待講演の時間短い．他の応用地質分野の受け皿とならず不評有．

総　評

以上のように，いろいろな問題点を抱えながらも今回のセッション企画は概ね好評だったといえそうである．今後も定番のセッションに加えて，タイムリーな話題への焦点の当て方など，より良い企画を目指すべきであろう．またポスター発表の定着化がいちだんと進んだ印象が強い．質問に対して「時間がありませんので」と逃げることが許されない状況での議論は，とくに若い世代の研究者には極めて有益な修業の機会となるであろう．一方で，セッションのたて方に配慮が行き届かなかったいくつかの分野からは不満の声がきかれた．プログラム編成会議にその分野の担当部会の委員がでていなかったことなどがその理由の一つに挙げられる．委員の選出方法を含めた行事委員会の在り方についても再考の時期に来ているのかもしれない．プログラム一覧表については利用者にとって実際に使いやすいものにするための抜本的改革が必要と感じられた．その他，さまざま指摘された点については，今後の検討課題としたい．

日本地質学会第106年総会・シンポジウム開催予告

日本地質学会第106年総会ならびにシンポジウム開催予定をご案内をいたします．詳細は次号以降に追って掲載いたしますが，現時点で予定されている内容をお知らせいたします．また，来年の年会（一般発表）は10月9日～11日まで名古屋大学において開催いたします．その内容についても次号以降順次アナウンスしてまいりますのでご注目下さい．

日　　程：1999年3月26日（金）総会・特別講演（予定）・討論会1件・懇親会
　　〃　　27日（土）討論会5件
会　　場：早稲田大学国際会議場

討論会

下記の6件のシンポジウムを行います．今のところ1日目の午後に5番目のシンポジウムを行う予定で，その他は2日目の午前，午後に分けて行う予定です．

1. 「カザフ共和国コクチェタフ超高圧変成帯研究の最近の進展とその地球科学的意義」
   世話人：小笠原義秀・丸山茂徳・J. G. Liou
2. 「首都の地質環境的立地適正―東京都および首都移転候補地を例として」
   世話人：楡井　久ほか
3. 「クリーンナップ・ゴールを獲得できた有機塩素系溶剤地質汚染現場」
   世話人：鈴木喜計ほか
4. 「日本の地質特性と地層認定のパラダイム」
   世話人：日本地質学会地層名命名規約策定委員会（代表：天野一男）
5. 「21世紀の地質学界と日本地質学会」
   世話人：研究企画委員会・事業企画委員会（代表：木村　学）
6. 「21世紀の地球科学と深海掘削」
   世話人：平　朝彦・木下　肇・木川栄一・玉木賢策・斉藤実篤

地学英語雑感⑨　パラグラフについて

嶋﨑吉彦

今までセンテンスをつくることについて，色々書いてきたが，このセンテンスが集ってパラグラフとなる．そのパラグラフが論文や報告書の基本的構成要素となる．今回はこのパラグラフについて述べたいと思う．

我々はどちらかというと，適当に何となく関連すると思われるセンテンスを一つのパラグラフに入れ，そして別にはっきりした基準をもたずに，多少なりと違うことになると何となく新しいパラグラフをつくる，という作文をやっていることが多いのではなかろうか？　筆者もご多分に漏れず，その一人である．

しかし良いレポートは決してそのようなものではない．まず科学的な文章は，事実の記載，推論，結論，議論，評価とさまざまな「用途」があるが，いずれの場合も，内容が明確に読者に伝わることが基本であろう．さらに十分に簡潔であって，読み易く，理解し易ければ，上々であろう．この中で，パラグラフは論理の最小単位と考えて良かろう．

このためには，どのようなパラグラフが良いのか？　論文全体について，首尾一貫した論理がなければならないのは，言うまでもないが，これは論文のあらゆる段階　―センテンスからパラグラフから章に至るまで―　一貫していなければならない．“Suggestions ed.7”では，“coherence”と表現して重要視している問題であるが，以前の版ではパラグラフの問題は採り上げていない．これは，どうも第7版の著者が，最近のUSGSの連中が書く文章のパラグラフが長すぎて，混乱していることが気に喰わなかった結果ではないかと思う．また今までは，日本でもパラグラフについて書かれたものは少ないようである．いずれにせよ，この問題は我々が余り考えたことがないように思われるので，例によって“Suggestions”を頼りにしながら，此処で基本的な事を述べる．

(1)　主題文

まずパラグラフには，主題文（topic sentence）が必要である．この主題文は明瞭にそのパラグラフの意図を示す必要がある．“Suggestions”ではUSGSのリポートには，この主題文がなくて単に多少のつながりを持ったセンテンスの「寄せ集め」に過ぎないものが多すぎる，と嘆いている．主題文はパラグラフの初めに置き，読者にパラグラフの内容を予想させると同時にその内容を限定するものである．その後に内容の詳細が述べられる仕組みである．確かに急いで読むとき，パラグラフの一行目を読んで次行以下を飛ばしたりした記憶があり，前に国連英語の項で書いた「斜め読みに耐える　―即ち斜め読みで概要を理解できる―　文章」とは各パラグラフにしっかりした主題文があるものであろう．

主題文をパラグラフの終わりに置く人もいるが，これは詳細から入って行って最後に総括する形になり，パラグラフの場合は読者は再読しないと理解できなくなることが多く，奨められないという．

(2)　構成

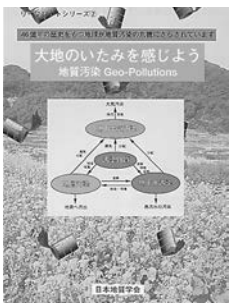
パラグラフには大きく二つのパターンがある．即ち，重要性が減少していく書き方と増していく書き方である．主題文が最初にくる場合は，前者が多いようである．つまり主題文のあとに最も重要な根拠を述べ，次第に意義の比較的低い根拠に移って行くものであろう．後者は比較的弱い根拠から重要なものへと移り，最後に結論的な総括文になる書き方である．いずれにしても，明瞭な構成が必要である．“Suggestions”では，地学独特の要素として，これに時間と場所のファクターも入れて4種類の構成に分けているが，これはわざわざ述べるまでも無かろうと思う．

(3)　長さ

パラグラフは思考の論理的単位であって，長さはロジックの展開で決まるものではあるが，長過ぎるパラグラフが余りにも多い，原稿一頁以上にわたるものは絶対に止めるべき，と“Suggestions, ed.7”はいう．さらに長いパラグラフの主な原因は主題文が弱いためとしている．どうしても長くなりそうな時は、強い主題パラグラフを最初に書き、これを支持するパラグラフを続けるようにして、個々のパラグラフは短くすべきともいう．この点に関しては筆者も賛成である．日本の地学屋はこの点は余り長いものを書く人は少ないように思う．むしろ米国人や欧州・中東の非英語人の方がこの点に問題のある文章を書く人が多いように思えるが，筆者の限られた経験で自信はない．

また，センテンス一つからなるパラグラフは，避けた方が良いと思う．まれに特定の考えを強調したり，関連のないパラグラフの「つなぎ」のために有効に使われることがあるが，通常は前か後のどちらかのパラグラフに入れるべきであろう．この点も筆者は“Suggestions”の著者に賛成である．

パラグラフについては，以上述べた程度の事項を考慮して書けば良いのではないかと思う．



☆リーフレットシリーズ第2作

『大地のいたみを感じよう―地質汚染 Geo–Pollutions』

1995年発行したシリーズ第1作「大地の動きを知ろう―地震・活断層・地震災害―」は，A2判裏表にカラー印刷というスタイルが，ハンディーで，さらにポスターにもなることで好評でした．第2作は環境地質研究委員会編集の地質汚染のリーフレットで，前リーフレット同様，会員の方には一部無料配布いたしますので，以下の要領でお申し込み下さい．

配布方法：会員本人には一部無料配布．それ以上の部数をご希望の場合，および非会員の方には，一部300円とさせていただきます．

申込み方法：学会事務局あて，必要部数を記入し，返信封筒（宛名を書き，郵送料分の切手貼付のこと）を入れてお申し込み下さい．なお，サイズが横15cm×縦21cm，重さが1部25gですので，一部郵送につきましては，以下のようにお願いいたします．

- 定形封筒の場合：90円切手貼付．ただし，二つ折にしての郵送となります．
- 定形外（15×21cm以上）封筒の場合：130円切手を貼付．
　一部以上の場合，部数×200円の代金と下記の郵送料を合わせて，切手でお送り下さい．（例，郵送料3部まで160円，8部まで270円，17部まで390円，20部まで580円）．20部以上の送付希望の方は，事務局までお問い合わせ下さい．

穂別町立博物館全景
町内から産出する動物化石を中心とした自然史系博物館（1982年開館）

モササウルス科の1属，ティロサウルスの生体復原模型
体長約6.5m，サイズは町内で産出した頭骨標本に基づく白亜紀後期の海洋で食物連鎖の頂点に立つ捕食者

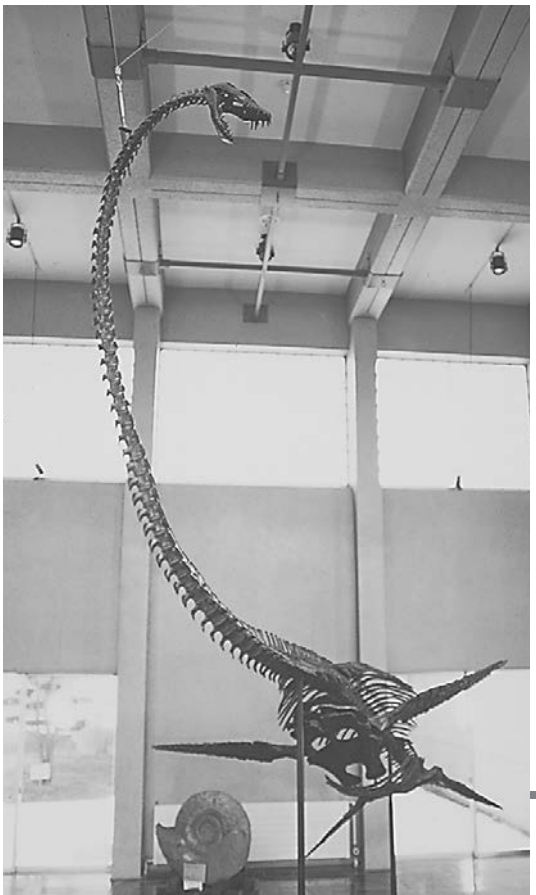
穂別町立博物館
HOBETSU MUSEUM

北海道勇払郡穂別町立博物館学芸員　櫻井和彦

穂別町立博物館は，「どこにでもある博物館」ではなく，「ここにしかない博物館」を目指しています．当館には，穂別町内から産出しない恐竜の化石やレプリカはありません．そのかわり，町内から産出した標本は豊富に展示されています．穂別町立博物館は，「穂別地域産」にこだわり，化石が「生きていたときの姿」にこだわります．

穂別町立博物館は，「穂別地域で産出する古生物を材料とし『地球と生命の歴史を考える』綜合博物館」です．当館の所蔵する豊富な自然史資料は，いくつかのレプリカや一部の標本を除き，全て町内から産出したものです．

当博物館は，1975年に発見された長頸竜化石がきっかけとなり，1982年に設立されました．当初は「本町で発見される化石（自然史）」と「町の歴史（人文）」を扱う二面性を備えた博物館でしたが，1990～1992年にかけての展示更新に伴い，自然史系に絞った博物館となりました．



「ホベツアラキリュウ」全身復原骨格
プレシオサウルス上科エラスモサウルス科中生代白亜紀後期，体長約8m（1977年発掘）
穂別町立博物館設立のきっかけとなった標本

＜常設展示＞

入口ホールには，当館設立のきっかけとなった長頸竜の全身復原骨格が展示してあります．これは長頸竜としては国内で初めて記載された標本です．「ホベツアラキリュウ」という和名および「ホッピー」という愛称がつけられ，博物館はもちろんのこと，穂別町のシンボルとして親しまれています．また，東アジアでは初めて報告された「ホベツモササウルス」をはじめモササウルス類の標本もいくつも産出しており，ティロサウルスの生体復原模型もあります．さらに，産出がほとんど穂別地域に限られ，新属新種として記載されたオサガメの祖先，メソダーモケリスの復原骨格も展示されています．このような中生代白亜紀の海棲爬虫類化石のほか，直径1mを超えるアンモナイトやイノセラムスなどの軟体動物化石も豊富に展示しています．

哺乳類化石は，数こそ少ないですが，ヒゲクジラや，イルカの祖先「ホベツケントリオドン」，デスモスチルスなどが産出しています．

また，比較標本として，ミンククジラやアカウミガメなどの現生脊椎動物の全身骨格も展示してあります．

これら豊富な動物化石を産出する背景として穂別町の地質についても解説がなされ，約1億5,000万年にわたる穂別町地質構造発達史を大きく6つの時代に分け，分かりやすく解説しています．

また，映像として「穂別町地質構造発達史」や町内の小中学校生徒が切り絵で製作した「クビナガリュウ物語」のビデオが上映され，用語解説「ホッピー百科」もあります．

＜特別展示＞

年1回，夏休みに合わせて開催します．今年は「地球物語り」として，地質学の普及書が，学問の発展や世界情勢などの変化に合わせてどのように移り変わってきたか紹介しました．

＜調査・研究＞

現在，1993年に発掘された長頸竜化石のクリーニング（剖出）作業中です．この標本は，まとまった産出としては，「ホベツアラキリュウ」に次いで2体目の長頸竜となります．また，「穂別町立博物館研究報告」を年1回発行し，昨年度末に第15号を刊行しました．

＜収集・保管＞

自然史資料は大部分が動物化石で，現在1,000点を超える穂別町立博物館登録標本のうち，その9割以上を占めます．このほか，その数倍に及ぶ未登録資料を収蔵し，年々増え続けています．また，当初の活動より引き継いだ4,000点以上の人文系資料も保管しています．

収集活動については，町内における野外調査を行い，毎年資料を蓄積しています．

＜教育・普及＞

博物館広報紙として「ホッピーだより」を月1回発行しています．その他，化石採集会・地層見学会・化石クリーニング教室・普及講演会などは，要望があった際に随時開催しています．

また，1996年には，化石を産出する北海道内の市町村の代表が一堂に会し，化石の保護および町おこしについて意見を交換しあう「北海道化石サミット」の第1回目が穂別町で開催されました．

＜運営＞

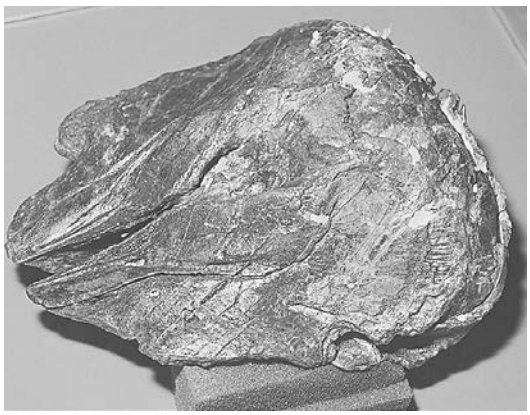
現在，学芸員2名，館長（兼任），事務職員1名，臨時職員1名（クリーニング作業），パート（窓口）の体制で，2年前には学芸員の研究室兼クリーニング作業場としての別館が完成しました．人口わずか4,000人余りの町としては恵まれた環境にあるといえます．ただ，これでも年々増え続ける資料の保管・整理作業に追われ，系統的な普及活動は行えないのが現状です．現在は，ホベツアラキリュウ発掘20周年も過ぎ，先の展示更新から間もなく10年が経過しようとしている中で，今後どのような博物館をつくっていくのかが一番の課題と言えます．

＜利用案内＞

開館時間：午前9時30分～午後4時30分
休 館 日：月曜日・国民の祝日の翌日・毎月月末・年末年始（ただし，7月・8月は無休）
観 覧 料：小・中学生・高校生100円（団体50円），一般300円（団体200円），団体は10名以上
交　　通：車の場合，札幌市から約2時間，新千歳空港から約1時間．そのほか，新千歳空港からバスあり．
所 在 地　054-0211　北海道勇払郡穂別町字穂別80-6
電話・Fax 01454-5-3141

オサガメの祖先メソダーモケリスの全身復原骨格（手前）と現生のアカウミガメの全身骨格（奥）
メソダーモケリスの産出は，穂別町周辺に限定される（中生代白亜紀後期）

現生ミンククジラの全身骨格
穂別町では，クジラやデスモスチルスといった海棲哺乳類化石も少数ではあるが産出するモニターは，タッチパネルを用いた「ホッピー百科」



イルカの祖先ケントリオドン科の1種「ホベツケントリオドン」の頭骨標本
新生代新第三紀中新世中期
穂別町内では，他にクジラの椎骨や下顎骨が産出している

富内イギリス海岸探訪（1998年9月14日実施）
穂別町富内では，白亜紀後期の海岸が見られる
宮沢賢治をしのぶ「ほべつ銀河鉄道の夕べ」の一企画として，「イギリス海岸」を案内した
これは，地層そのものを社会教育の教材として用いる試みの一つである

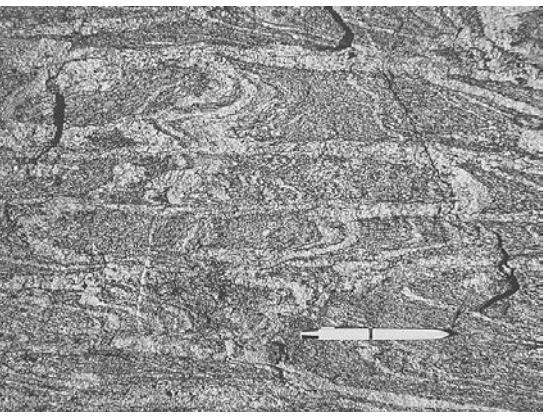
1. Mozambique–Zimbabwe国境のChimanimani山地と山村．向かって右手奥の尾根はUmkondo Groupの未変成・未変形砕屑岩相（Zimbabwe facies），左端の山地強変形quartzite（Mozambique facies）．

2. Chimanimani山地を行く御一行．中央奥の鞍部がMozambiqueとの国境稜線．露岩は強変形quartzite（Mozambique facies）．

IGCP–368（東ゴンドワナの原生代事件）International Field Workshop「The Mozambique belt of Southeast Africa」参加報告

[はじめに]：1998年7月11日から18日まで，IGCP–368関連の表記国際野外巡検が行われ，日本から研究代表者の吉田　勝（大阪市立大）と小山内康人・安東　努（岡山大），加納隆（山口大）の4名が参加した．同巡検は，これに先立ってケープタウンで行われたGondwana–10の集会およびプレトリアで開催されたGeo–Congress（98年度南アフリカ地質学会総会）とIGCP–368の3者の共催によるものである．巡検リーダーはDr. Geoff Grantham（Univ. of Pretoria）とDr. P.H.G.M. Dirks（Univ. of Zimbabwe），参加者は南アフリカ，ジンバブエ，ボツワナ，モザンビーク，英国，ドイツ，ロシア，スイス，USA，日本の10か国から総勢18名であった．

[巡検の目的]：ガイドブックをもとに本巡検の趣旨を説明しよう．原生代末期に，東および西Gondwana両大陸が合体して一つの超大陸Gondwanaを形成したとされているが，両者の境界をどこに引くかということに関連して2説ある．一つは，東Gondwanaの西側境界をKaapvaalおよびZimbabwe Craton（両者をあわせKalahari地塊）の東縁とし，東南極地塊よりなる東GonndwanaとKalahari地塊を含む西GondwanaがNeo–Proterozoicないし Pan–African造山により合体したとする．また他方は，Kalahari地塊を東Gondwanaの一部と考え，その西側境界をNambiaとBotswanaを通る縫合線（Damara帯を構成）とし，Kalahari地塊と東南極地塊は10～12億年前のGrenville期にはすでに合体していたとする説である．そこで問題となるのは，東南極地塊とKalahari地塊との間にあったとされるMozambique海が，Grenville期（10～13億年前）か，あるいはPan–African期（8～5億年前）のいつ頃まで存在していたかということである．この問題は，東南極のDronning Maudlandにおいても検討されてきたが，大陸氷床におおわれて良く見えない．そこであらためてその観点から，Karahari地塊の東縁からMozambique帯にかけて分布する後期原生代の表成岩層（Umkondo Group）の層相変化や構造および両地帯の基盤岩（始生代花崗岩）に残された構造を観察しよう，というのが本巡検の目的である．



3. Vanduzi Migmatite Gneiss．褶曲した片麻状構造とstromaticなmigmatitic構造（古期）を切って，新期の南北性の面構造（ボールペンの向き）とこれに沿った直線的なleucosomeの形成が見られる．

[巡検の経過と概要]：

7月11日：am. 7　Pretoria発，中間点Beit Bridgeで国境を越えGreat Zimbabweまで約800 km．車数台に分乗してKaapvaal Craton, Limpopo belt, Zimbabwe Cratonを縦断してサバンナの平原をひた走る．車窓はるかにBushvelt complex，Transvaal系など先カンブリア時代地質学の名所を遠望するが，時間にせかれて素通りし未練を残した．pm. 7にロッジ着．pm. 6には夕日が落ちる．日没後の高速ドライブは大変危険である．先頭車が道路を横断していた牛をはね，レンタカーは大破．乗員にケガがなく，かつ車が動いたことは僥倖であり，夕食のバーベキューパーティの格好の話題となった．南アフリカは真冬．高原地帯では朝夕は0度前後まで冷え込む．

7月12日：Zimbabwe Craton東部の始生代花崗岩と同Craton東縁のChimanimani山地に分布するUmkondo Groupの見学．Great Zimbabweとは，かつて栄えたZimbabwe王国の石造遺跡群で，26～25億年前のやや片理を帯びた花崗岩閃緑岩（～トーナル岩）の岩山を利用して作られている．Umkondo Groupは11億年前後の年代をもった表成岩層で，岩相の違いによってZimbabwe faciesとMozambique faciesに分けられる．同山地において，前者は下位よりcalcareous series, argilite，quartziteよりなり，多量のドレライトシートを伴い，ほとんど未変成・未変形である．最初のポイントでは氷稿粘土的な外観を有しているのが印象的であった．いっぽうMozambique faciesはMozambique帯側に分布し，主にquartziteよりなり，強い変成・変形を受けている．この両者がいかなる関係にあるかが，本巡検のテーマの一つである．

7月13日：Chimanimani山地のUmkondo Groupの未変成・未変形岩相と強変形quartzite（Mozambique facies）の見学（写真1）．この日はモザンビーク国境まで，ライオンでも出そうな？草原まじりの山道の往復約10 kmを徒歩で，quartzite中の剪断帯とその下位の石英長石質片麻岩を見る（写真2）．後者はMozanbique帯の基盤をなす始生代岩石がPan–African期に再変成したものとされる．結局のところ，Craton上のUmkondo Groupは，Mozambique帯側よりThrustシートとして移動してきたと考えられているようである．

7月14日：Zimbabwe側国境の町Mutareより，Mozambiqueへ入国，国境近くのManica近郊のバンガロー形式のホテルに以後3泊する．Mozambiqueはかつて激しい内戦と飢餓に苦しんだが，今は一見のどかで落ちついた光景であった．

7月15～16日：以後2日間はZimbabwe

cratonの東縁の始生代基盤の花崗岩類が，東方にむかって（国境より約80～90kmの間で）Mozamnbique帯の変動による若返りを受ける様子と，花崗岩体中に挟在する砕屑岩起源の変成岩類（Frontier formation）を見学する．

国境付近に分布するVumba granitic gneissは，cratonのTTGと同様の片状岩で，Rb/Sr全岩アイソクロン年代は西部で3231±391Ma，東部で2560±249であるが，biotiteのAr/Ar年代は1067±4～1084±4Maとなる．その東方のMessica granitic gneiss（斑状花崗岩主体）はRb/Sr年代は2348±267Ma，Ar/Ar年代534±2.5Maである．さらに東方のNhansife granitic gneissは，981±33MaのRb/Sr年代が467±2MaのAr/Ar年代に，Chimoio granitic gneissは1236±203MaのRb/Sr年代が558±2.5MaのAr/Ar年代となる．露頭オーダーでは，こうした年代の若返りに対応して東西性の古い片理を切って，Mozambique帯の構造方向に平行した南北性の片理とこれに伴う優白質脈の形成があり，新旧2期の構造運動とミグマタイト化が観察できる（古期はGrenvillian，新期はPan-African変動に対応，年代値は巡検案内書による）（写真3）．

Frontiern formationの変成岩は，quartziteを主体に一部多量のsillimaniteを含む泥質～砂質岩よりなり，469±2.7MaのAr/Ar年代を示す．吉田はこの中からkyanite様鉱物を含む滑石片岩を見いだしたが，もしそうだとすると相当の高圧条件が予想される．これらをUmkondo Group相当（Mozambique facies）とする考え方もあるが，基盤のGreenstone帯の砕屑岩が再変成したものである可能性もあると感じられた．

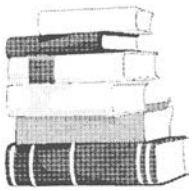
7月17日：再び国境を越えてZimbabweへ，Mutare付近のGreenstone帯を見学．32億年の岩帯は27億年のtonaliteの貫入と26～25億年の新期花崗岩の貫入を受ける．褶曲軸に沿った珪岩の円礫主体の礫岩層（含金礫岩，硫化物の鉱染あり）を見る．風化した露頭はまるで手取の礫岩を見るようであった．

7月18日：南アに再入国．吉田の案内で国境近くのLimpopo帯の高度変成岩（Sand river Formation）を短時間の見学．終日800kmをひた走ってPretoria帰着は夜8時をすぎていた．

[おわりに]：今回見たモザンビーク帯の表成岩類には非変成岩相が多く，アフリカ東部で話に聞くような高度変成岩類はあまり見ることができなかった．しかしそのような地域もあるということを知り，基盤岩の若返りのようすを見ることができた．広大なアフリカ大陸からすれば南のはしっこのごく一部ではあったが，アフリカとクラトンというものを実感することができ，実り多い8日間であった．

巡検の全期間および終了後のサンプル発送に至るまで，巡検リーダーのGranthamご夫妻には大変お世話になった．小山内は文部省科学研究費補助金（国際学術研究）「パンアフリカン変動とゴンドワナ形成」（研究代表者：白石和行，課題番号09041116）より，加納は同じく「国際研究集会，東ゴンドワナにおける原生代事件の企画調査」（研究代表者吉田　勝，課題番号10894020）より援助を受けた．関係各位に感謝申し上げる．

（文責：山口大学理学部　加納　隆）



紹　介

石油の成因
―起源・移動・集積―
田口一雄　著

〔共立出版株式会社　1998年発行，B6判，140ページ，定価1,600円〕

本書は，“大学の教養課程・専門課程の学生を対象”としており，その内容は，“高校卒業以上の知識があれば十分に理解”できるよう記述，構成されていると，はしがきに書かれているが，扱う分野は広く，内容も高レベルである．著者，田口先生には，やはり石油についてまとめた著書『石油はどうしてできたか』（青木書店，1993年）がある．前著は一般読者を対象としており，石油そのものの成因に焦点をあて，石油の有機起源説と無機起源説の変遷と論争の歴史がトピックスとしてとりあげられている．これに対して本書は，有機地球化学と石油地質学の研究者としての立場から，最新のデータも取り入れながら，石油の起源から一次移動，集積にいたる石油鉱床の生成プロセス全体を解説したものである．その中では，起源物質としてのケロジェンの重要性が改めて強調されている．よく整理された構成で，あたかも先生の講義ノートを見るようである．本書を紹介するには，その目次をここに記すのが最も適当であろう．

第1章　石油の成因への序論

はじめに，炭素サイクルと石油成因説，石油の起源と有機成因説，堆積盆における有機物の存在様式，石油の有機成因説と三位一体機構，ケロジェン起源説

第2章　石油の起源物質

起源生物と生体構成有機物，有機物の堆積，堆積有機物と続成作用，ケロジェンとその成因，ケロジェンの組成，ケロジェンの分類，石油起源物質の安定炭素同位体比

第3章　石油の生成

有機熟成・変成と石油生成，石油生成と熟成指標，ケロジェン起源の炭化水素，ケロジェンの熟成進化，オイル生成曲線，石油生成の温度と反応時間，反応速度論的にみた石油生成，いろいろな石油根源岩からの石油生成，天然ガスの生成

第4章　石油の1次移動と集積

ケロジェン起源オイルの1次移動説の変遷，炭化水素の分子拡散による1次移動，マスバランスから見た排出効率，オイル排出の駆動力と保持力，固体有機物によるオイルの吸着，ビチュメンと貯留岩石油の対比，オイル吸着説から見た排出効率と排出時期，微破砕構造の形成とオイル排出，石油生成における開放性・閉鎖性

B6判の小型本で，頁数も140ページと大変コンパクトである．この中に，上記の内容が全て盛り込まれているため，初学者にとっては必ずしも“分かりやすい解説”になっていない部分も見受けられる．たとえば，覚えきれない多数の有機物分子名や，初心者には実体を理解しにくいロックエバル分析値，排出駆動力についての短かすぎる解説などである．本書ほどの内容を解説するには頁数が少なすぎるという印象は拭えない．頁数等の制限によりやむを得ずに割愛した部分もあったと想像される．はしがきで御自身が書かれているように，本書を十分に理解するには，関係する辞典や用語集で補う必要があろう．本書は，学生にとって，気軽な読み物ではなく，むしろ時間をかけて読む価値のある密度の高い教科書である．本書一冊を読破することにより，石油の成因に関する最新の知識と考え方を十分身につけることができる．またすでに石油鉱床の起源について知識のある専門家にとっては，知識を確認し更新する手がかりとなる良き参考書となるだろう．巻末には，小型本に似合わず多数の参考文献リストと索引が付けられ，さらに詳しく調べようとする者にとっては大変親切な資料となっている．

田口先生は，原稿がほぼ完成した1997年3月6日，本書が出版される約1年前に急逝されました．その後，北海道大学の鈴木徳行さんの献身的な努力により印刷原稿が完成し出版に至ったとのことです．ここに，先生の御

冥福を改めてお祈りすると共に，石油地質学の発展に尽くされ，我が国に有機地球化学の基礎を築かれ，また最後にこのような著書を残してくださった先生に心から感謝の意を捧げます．

（東京大学　松本　良）

丘陵地の地盤環境

日本応用地質学会関西支部
＋関西地質調査業協会（共編）

〔鹿島出版会　1998年発行，B5判，229ページ，定価5,700円〕

第四紀の研究では，大きな地形区分として，山地・丘陵・段丘・平野の4区分を用いて説明されることが多い．平野に関しては，人間生活に関係して，人が生活する場としての地盤の研究が数多く実施されてきたし，地盤沈下の課題に関連して多くの成果があげられてきた．戦後の高度経済成長に伴って，生活の場が，平野から段丘，そして丘陵へと広がってきた．この際，丘陵地は削られ，平坦化され，生活の場として供給されてきた．その変貌の様子は，本書にも紹介される国土地理院発行の地形図の変遷から読みとることができる．この丘陵地の変貌の過程で生じる課題は，まさに応用地質学の課題に他ならない．関西では，大阪層群と呼ばれる鮮新・更新統の地層群からなる丘陵地がその対象となった．この40年間に積み上げられてきた丘陵地を人間生活の場として利用する際の実務的な経験と，そこから得られる地質学的な成果の集大成が本書である．丘陵地の地盤の利用が従来よりもさらに大規模に実施されている現在，本書が出版されたことは重要な意義を持つと思われる．

本書は，
第1章　丘陵地の地盤環境と社会的利用
第2章　丘陵地の地形・地質環境
第3章　丘陵地地盤の工学的特性
第4章　丘陵地地盤の地質環境特性
第5章　丘陵地地盤の調査法
第6章　地盤情報利用の問題点と提案―現状と展望―
の6章からなる．

第1章では，丘陵地とは地形・地質からみてどのような歴史をたどってきたもので，その地盤環境を理解するためには，その形成史の観点が重要であることや，理学と工学の接点の必要性がのべられている．また，日本社会の中での丘陵地の利用のされ方の変遷をふりかえり，開発の問題点についても言及している．

第2章では，丘陵地地形や地質の基礎的な情報を整理した後，特に大阪周辺の大阪層群やそれらが作る丘陵地形の特徴についてまとめられている．

第3章は工学的特性に関する章であり，丘陵地地盤の物理的性質や工学的性質に関する基礎的な情報を整理した後，日本各地の丘陵地地盤の特性，大阪層群の工学的性質，地下水との関連について紹介されている．

第4章は第2章と第3章の記載的部分から，それらを統合して，丘陵地地盤の形成過程や風化過程，さらには応力履歴などとの関連を考察している．

第5章は実務的な内容であり，調査法に関して，地形・地質，地盤工学的調査や検査に関しての情報がコンパクトにまとめられている．

第6章はこのような総合的な地盤情報がどのように整理され，社会に有効に利用されていくかに関する問題点が指摘され，情報の活用に関する提言がまとめられている．

評者の印象として，本書に関する内容は非常に貴重であり，もっと早くにこの種の出版がなされていたものと感じていた．本書が，今後の丘陵地地盤の研究や利用，また地盤災害軽減に関しての有意義な情報として利用されることが期待される．大学での地質学関連の教室を卒業して，地質調査業へ就職される学生の数は多い．しかし，本書にまとめられた内容を大学時代に学ぶ機会を与えられる学生の数は少ないと思われる．本書は，大学では教育される機会に乏しい社会との接点を持つ地質学の知識にふれる貴重な内容を含んでいると感じられる．

この出版が，現場で多くの経験をされた関西地質調査業協会の方々と応用地質学会関西支部との共編というかたちでなされたことは貴重であり，出版に関するご苦労に敬意を表する次第である．

（京都大学理学研究科　竹村恵二）

寄贈本・紹介依頼本

・田崎和江編集・監修：「家庭でできる地球環境実験」
・田口一雄著：地学ワンポイント6「石油の成因―起源・移動・集積」　共立出版

ご案内

本会以外の学会および研究会・委員会よりの催し物のご案内を掲載します．

第2回国際土壌・地下水環境ワークショップ

2nd International WORKSHOP on Geo-Environmental Restoration IWGER'99

開催日：1999年1月13日（水）　制度編
　　1999年1月14日（木）　技術編
場　所：パシフィコ横浜　3階大会議室
主　催：第1日　環境庁　神奈川県（制度編）
　　第2日　（社）土壌環境センター（技術編）（「環境事業団地球環境基金」助成事業）
後援（予定）：通商産業省，建設省，厚生省，農林水産省，運輸省，環境庁，神奈川県，環境事業団地球環境基金，本学会ほか
趣旨：土壌・地下水汚染現場における対策の実態に関する国際的な情報交換を通じ知見を深め今後の我が国の現場的な問題解決に資する．
参加費：無料（ただし1月13日の懇親会に参加される場合は，あらかじめ参加費3,000円を申し受けます．）
申し込み方法：氏名，所属団体・部署，住所，電話，Fax，懇親会に参加する/しないを記入して，Faxまたは郵送にて下記事務局宛お申し込み下さい．参加登録票を発送いたします．
事務局：社団法人土壌環境センター　担当：服部，青木
〒108-0014　東京都港区芝4-4-5　三田KMビル5F
電話　03-3452-2593　Fax　03-3452-2832
申し込み締め切り：12月15日（火）
（ただし，先着順で定員600人．）

第8回化石クニダリア海綿国際会議の御案内

第8回化石クニダリア海綿国際会議が，平成11年9月12日-16日の5日間，日本地質学

会，日本古生物学会，斎藤報恩会，仙台コンベンションビューロー，国際観光振興会後援のもとに，仙台市の仙台国際センターで開催されます．この国際会議は，4年ごとに開かれるサンゴ等のクニダリア類，海綿類の古生物研究者を中心とした会議で，仙台での開催はアジアで初めてです．会議の前後には巡検があり，わが国で3巡検，中国で3巡検，計6巡検を予定しております．今回の会議におけるシンポジウム並びに講演のテーマは以下のとおりです．

1. Research in the 21st century : where have we been and where are we going?
2. Paleobiology of Cnidaria and Porifera
3. Depositional and paleoecological processes of Cnidaria and Porifera
4. Paleobiogeography of Cnidaria and Porifera
5. Biomineralization and diagenetic processes in Cnidaria and Porifera
6. Evolution of reefs and their relationship to global biogeochemical cycles
7. Evolution and biostratigraphy of Cnidaria and Porifera

興味のある方は下記まで御連絡下さい．

連絡先並びに2nd Circular申し込み先：
〒980–8578 仙台市青葉区荒巻　東北大学総合学術博物館
第8回化石クニダリア海綿国際会議組織委員会　森　　啓
電話 022–217–6769　Fax 022–217–6631
E–mail : mori@dges.tohoku.ac.jp

（森　啓）

公募

教官公募等の求人のニュース原稿につきましては，採用結果をお知らせいただけますようお願い致します．

公募結果

既掲載の公募の採用結果のご報告がありましたので，お知らせいたします．

・大阪工業大学工学部　一般教育科　地球科学教員公募結果

田中　準氏

東京大学地震研究所の教官の公募について

公募人員：助手　1名．

所属：採用決定後本人と相談のうえ決定する．

専門分野：地球化学（現在，主に微量元素または同位体を用いて地球化学的研究を行っており，今後マグマあるいはマントル物質を対象とした研究，および，分析手法の開発に意欲的である者）

応募資格：博士の学位を有する者，または着任時に博士の学位取得が確定している者．

採用予定時期：平成11年4月1日

提出書類

履歴書（書式自由）
研究業績リスト（査読の有無を区別すること）
主要論文の別刷3編以内（業績リストに○印を付すこと）
これまでの研究概要（2,000字程度）
将来の研究計画（2,000字程度）
応募者を熟知し，意見を伺える2名の氏名，連絡先，応募者との関係を記載した書類

公募締め切り：平成11年1月14日（木）必着

問い合わせ先：
東京大学地震研究所火山噴火予知研究推進センター　中田節也
電話 03–3812–2111 内線5695
E–mail : nakada@eri.u-tokyo.ac.jp

提出先：封書を用い，表に「地球化学助手応募書類在中」と朱書し，郵便書留で郵送のこと
東京大学地震研究所人事掛宛て
〒113–0032 東京都文京区弥生1–1–1

平成11年度京都大学防災研究所共同研究の公募

公募事項（共同研究公募要領参照）

1. 一般共同研究の募集
2. 特定共同研究への参加者の募集
3. 研究集会の募集

申請資格：国公私立大学および国公立研究機関の教官・研究者またはこれに準じる者

申請方法：所定様式による申請書の提出．ただし，一般共同研究および研究集会については，研究代表者から申請書を提出して下さい．

研究期間：
・一般研究は，平成11年4月から平成12年2月まで
・特定共同研究は，平成11年4月から平成13年3月まで
・研究集会は，平成11年4月から平成12年2月まで

申請期限：平成10年12月11日（金）

問い合わせ先：
〒611–0011 宇治市五ヶ庄
京都大学防災研究所　総務課研究助成掛
電話 0774–38–4010

詳しくは，同所ホームページhttp://www.dpri.kyoto-u.ac.jp/default.j.htmlを参照されるか同研究所にお問い合わせ下さい．

1999年スミソニアン・フェローシップの募集

標記の募集がきています．スミソニアン・フェローシップは，地球科学・古生物学・進化生物学・系統生物学を含む多様な研究分野の研究者がSmithsonian Institutionに属する研究所（National Museum of Natural History, Smithsonian Environmental Research Center など）に滞在研究を行うことに対して奨学金を提供するシステムで，主な種類は次の通りです．

Senior Fellowships　学位（Ph. D）取得後7年以上，ただし2年前に応募のこと．3～12か月間，1年27,000米ドル．

Postdoctoral Fellowships 学位（Ph. D）取得後7年未満，3～12か月間，1年27,000米ドル．

Predoctoral Fellowships　学位論文研究中の院生，3～12か月間，1年15,000米ドル．

応募の締め切りは1999年1月15日，事前に受け入れ側のスタッフと打ち合わせしておく必要があります．詳細および応募書類等については下記ホームページをご覧下さい．あるいは，返信先を明記の上下記にお問い合わせ下さい．

ホームページ：
http://www.si.edu/research+study/
Office of Fellowships & Grants
Smithsonian Institution
955 L'Enfant Plaza, Suite 7000
Washington D.C.20560–0902
Phone :(202)287–3271
E–mail : siofg@ofg.si.edu

なお，この募集は毎年この時期に行われています．今回応募が間に合わない場合，来年の応募のためにあらかじめ準備しておかれるとよいと思います．

委員会報告

本会以外の学会および研究会・委員会よりのお知らせを掲載します．

1998年　IGC理事会報告

1998年2月2日から5日まで98年度のIGCP理事会が開かれた．この結果については本ニュースNo. 6（p 18–19）月号に国内委員会の土委員長より報告されているので，遅くなったが，会議の印象その他について簡単に報告する．

98年の理事会の構成員は次のとおりである．＊はWorking Group委員長

IUGS委員長：R. Brett

IGCP委員長：E. Derbyshire

WG1（層位学，地質学，化石燃料）：E. M. Truswell*, M. A. Fedonkin, E. Roaldset, E. Robinson

WG2（第四紀，環境および化石燃料）：N. W. Rutter*, N. Samani, E. Derbyshire, I. Miang–Diop**

WG3（鉱床，岩石学，地球化学）：C. Rapela*, 坂野昇平，Z. Xun, P. Jakeš

WG4（地球物理学，テクトニクス，構造地質学）：C. MacPowell*, A. B. Kampunzu, F. Bergret, K. Kockel

**お産のため欠席

今回の理事会で新しく提案され，あるいは確認されたことを次に報告する．なお，IGCPはUNESCOの科学面の行う事業の中で評価が高いとの報告があった．

1）　今年度進行中の事業は41件，1年延長（基金なし）が8件．新規採択は日本からのもの2件を含んで10件

2）　英国のUNESCOへの復帰に伴い，英国からIGCPに直接拠出されていた基金が打ちきりになり，また，米国の拠出金の減額によりIUGSからの醵金の49％が減額された．UNESCOからの拠出は漸増しているがIUGSの減額分を賄いきれない．1997年度は総額$259,000である．

3）　事業の採用数は大幅に変えず，成果による補助金の差別化を強めることにした．現在最高$9,500，最低$3,000で平均$5,700で，これは運転資金に過ぎない．

4）　新しく始まる事業の1年目は成果の報告は必要がない．新事業には2年間は平均よりやや低めの補助金を支給する．

5）　事業代表者は複数である方が望ましいことを申請の要綱に付け加えることにした．

6）　研究機関の民活が世界的に行われているが，このため研究が公衆の利益よりも短期的な目的のために向けられる傾向がある．このことを色々な機会に訴えるべきであるとの発言がオーストラリアのMacPowellからあった．

7）　ボツワナのKampunzuよりUNESCOが中心になってアフリカ大陸の地球科学と環境科学の発展のためにアフリカ・地球科学研究センターを設立し最新の分析器具をそろへるようにという提案が受理された．UNESCOは調査費として10万ドルを支出できるだろうという報告があった．委員長と提案者を含む調査委員会を作ることになった．私はアフリカにおける社会基盤を理解していないので懐疑的意見を述べた．

8）　IUGS（Intern. Union of Geological Sciences）が発行している“Episodes”の発行を中国が引きうけた．

9）　事業の採択，経過報告の評価について私もいくつかの発言をした．

a）　2年目の成果の評価基準に一貫性がないのではないかと主張したが，取り上げられたとは思えない．今年も問題があれば発言するつもりである．

b）　成果をあげた事業でも同じ人が3回（15年）続けて代表になるのに異議を述べたが，少数で否決された．

c）　地震関係の事業が提案されることが多くなったので，活動帯のネオテクトニクスの委員を採用してもらいたと述べた．阪神地震について地質学が全く役に立たなかったなどというのでは困る．

私の任期は来年2月までですが，新事業の申請に当って理事会の雰囲気等を知りたい要望があれば個人的にお話します．事業が始まったら成果の幾つかは2年度の報告から国際誌への投稿を含むように強く勧めます．また最終報告は紀要などでなく国際的（日本を含めて）出版物に印刷されることを強く勧めます．

（坂野昇平）

環境地質研究委員会：書籍，論文集（郵便振替　00130–5–701805　日本地質学会環境地質研究委員会）

第1回地球環境フォーラム“環境地質学からみた地球環境の諸問題”―地球環境研究100年の系譜―（30ページ，B5判，定価1,000円，送料190円）
第2回地球環境フォーラム“地域から地球環境問題を考える”（46ページ，B5判，定価1,000円，送料270円）
第2回環境地質学シンポジウム講演論文集（336ページ，B5判，定価2,000円，送料380円）
第3回環境地質学シンポジウム講演論文集（432ページ，B5判，定価2,000円，送料380円）
第4回環境地質学シンポジウム講演論文集（392ページ，B5判，定価2,000円，送料380円）
第5回環境地質学シンポジウム論文集（446ページ，B5判，定価3,000円，送料380円）
第6回環境地質学シンポジウム論文集（422ページ，B5判，定価3,000円，送料380円）
第7回環境地質学シンポジウム論文集（432ページ，A5判，定価4,000円，送料380円）
佐藤傳蔵著“地文学”完全復刻版（185＋4ページ，B5判，定価1,000円，送料400円）
東京ガス田上の地質環境と地下開発―地下開発におけるガス問題をいかに克服するか―（70ページ，B5判，定価1,000円，送料240円）
誰がだすべきか？「地質汚染調査・対策費」を　その1　有機塩素系化合物地質汚染を例として（129ページ，＋付録38，B5判，定価1,000円，送料310円）
シンポジウム“地質汚染（その2）”（97ページ，B5判，定価1,000円，送料240円）
シンポジウム“地質汚染―水質汚濁防止法の改正を実効あるものに―”（59ページ，B5判，定価1,500円，送料240円）
シンポジウム“地質汚染―残土処理と地質環境”（91ページ，B5判，定価1,500円，送料240円）
シンポジウム“地質汚染―地球環境の持続的開発と廃棄物最終処分場の閉鎖条件について”（46ページ，B5判，定価1,500円，送料200円）
国際シンポジウム“環境保全と鉱物資源の活用”（84ページ，A4判，定価2,000円，送料390円）

火山部会

1998松本大会議事録

日　時：9月26日（土）12：10–13：00
場　所：信州大学（地質学会松本大会）
1.　ランチョン参加者：22名
2.　部会役員選出
　部会役員全員の留任を決めた．なお，部会役員の任期については，2年とし，再任を認めることとした．
部会役員名

火山部会代表幹事	吉田武義
連絡担当	林信太郎，三宅康幸
ニュース担当	千葉達朗
行事担当	伊藤順一，鎌田浩毅
編集担当	高田　亮，木村純一
各賞担当	周藤賢治
教育・普及担当	佐藤隆春
地質基準策定担当	山元孝広

3.　連絡係（林さん）よりの報告
　HP作成のための費用の一部に地質学会から部会への補助金をあてた（アドビページミル，ユードラプロなど；総計34,564円）．購入したソフトは，火山部会HP作成に利用した．現在，表紙のみ（http://www.akita-u.ac.jp/~hayashi/bukai.html）が存在する．
　内容についてアイデアを募集したい．（応募先はhayashi@ipc.akita-u.ac.jp）．なお，電子メールによる連絡は当初，Ccで行ったが，悪質な業者にリストが悪用される場合があるので，Bccによる配送に変更した．また，現在の連絡システムは手動メーリングリストとして部会員に開放されていることも確認した．
4.　今回の地質学会におけるセッションについて
　高橋正樹さんから最初に部会制について，紹介と説明があった．伊藤順一さんから，行事委員会等での経過報告がなされた．なお，伊藤順一さんの行事委員会委員としての任期は2年であり，来年度についても，伊藤さんにお願いすることとなったが，必要に応じて，作業を手伝って頂ける方を，伊藤順一さんの方から推薦して頂くこととなった．
　伊藤順一さんから，来年度の地質学会におけるセッションについて現状報告がなされた．
　岩石部会の小畑代表幹事より，前日行われた岩石部会での議論の紹介があった．それによると，代表幹事は小畑さん，行事は原山さんから榎並さんに交代した（行事関係の委員は1年で交代する）．また，各賞担当は田切さん（任期は，2年）である．
　今年度のセッションについては，これまで岩石学会では，部会としては，特にセッションの提案に，関与してこなかった．ただし，これに関しては，一部のセッションが部会間で重なったり，花崗岩のセッションがなかったり，いくつかの問題があったので，今後は部会内でセッション案を公募することとなった．
　小畑岩石部会代表幹事の報告を受けて，議論がなされ，今後は，部会間でもセッション案の調整が必要であるとの結論に至った．そこで，岩石部会と火山部会の間では，セッション案の摺り合わせを行うこととした．その手順としては，まず，10月一杯に両部会で部会員よりのセッション提案を募集する．これを，各部会において，セッションの部会案を当該幹事がまとめる．これをさらに，岩石部会と火山部会の間で調整して地質学会行事委員会に提案することとした．
　ただし，地質学会でのセッションの持ち方については，現在まだ流動的であるとの報告が，2000年松江大会担当予定者よりあった．
　火山部会としては，地質学会春のシンポジウム，合同大会での地質学会関連セッションについては，特にセッションの提案は行わないこととした．上に議論したのは，来年度秋の名古屋における地質学会年会でのセッション案についてのものである．
　さらに，吉田より来年度の地質学会が火山学会と重なる可能性（10月9，10，11日）が指摘され，その場合は，岩石部会と協議し，両分野にまたがるようなセッションを提案するなどの手だてが必要であるかもしれないとの報告があった．
　今回の方式による火山部会関係のセッションはたいへん盛会であったことから，今後とも，部会として積極的に活動してゆくことを確認して，散会した．

（吉田武義）

岩石部会

松本大会　ランチョンの報告

　地質学会松本大会開催中の9月25日に，岩石部会のランチョンを開催し（参加者は20数名），昨年度の役員からの活動状況の報告と今年度の幹事等の選任および承認が行われました．その概要をお知らせします．

1.　昨年度の役員からの報告
@事務局員（西山忠男・熊本大）より
　1）　従来の方式では大会のプログラム作成の事務負担が大会行事委員に集中していた．この問題を解消するために今大会から，セッション制が採用された．
　2）　今大会では，コンビーナーが自由にセッションを申し込んだために，総ての分野をカバーできなかった．提案されたセッションに入りきらない講演を救済するために，岩石部会として“変成岩一般”のセッションを提案した．
　3）　岩石部会として地質学論集“21世紀を担う地質学”に2編の総説を掲載した．
@行事委員（原山　智・信州大）より
　1）　本年1月以降の地質学会行事委員会に出席した．
　　この時点で，既に岩石部会関係者から各シンポジウムが申し込まれており，シンポジウムの内容との調整にはタッチできなかった．主な活動は，各セッショの時間割を決めたことである．
　2）　全発表件数は約750件，その内訳は，口頭：約620件，ポスター：約130件

2.　新部会代表者・幹事等の選任および承認

代表者：小畑正明（京大）	1998年4月1日より
幹事（行事委員）：榎並正樹（名大）	新任
幹事（各賞推薦委員）：田切美智雄（茨城大）	留任
事務局員：平島崇男（京大）	新任

　部会規約では，各委員の任期は2年となっているが，行事委員については翌年度大会の開催校から選出した方が望ましいとの意見で一致し，榎並氏を選出した．
3.　初めての試みであるセッション制による講演会について意見交換を行い，来期の地質学会セッションのあり方について議論した．概要は以下のとおり．
　@今年度のセッション制について批判的な意見も出たが，地質学会としては当面この方式を続ける意向らしい．
　@岩石部会・火山部会関係では似た内容のセッションが乱立した反面，一部の分野をカバーするセッションが欠落していた．この様な問題を解消するために，岩石部会関係のシンポジウム申し込みを岩石部会でとりまとめる案が提案された．
　@その具体案として以下の試案が提案された．

岩石部会関係のシンポジウムを10月末までに部会代表者に提案していただく．この提案をもとに役員間で部会案を作成し，それを部会関係者にメールで公示した後，地質学会のシンポジウム応募時に地質学会行事委員会に申し込む．

追記：9月26日，小畑部会長は火山部会ランチョンに出席し，吉田代表幹事と懇談し，岩石部会と火山部会のシンポジウム案のすり合わせもしたうえで，地質学会に申し込むことで合意した．

（文責：事務局　平島崇男）

情報地質部会

松本大会　ランチョン報告

地質学会情報地質部会のランチョン（1998年9月26日）で話し合われたことについて報告する．

情報地質部会の活動

・本年度は役員の改選を行わず，今年度の役員が継続する．
・日本情報地質学会の活動（講演会・シンポジウム・講習会など）を共催または後援していく．

1998年度の年会報告

・年会で情報地質セッションを設け，ポスター発表を行った．
・信州大学の協力により，コンピュータによるデモが行いやすく，さらにLANの活用ができたのでたいへん有意義であった．
・招待講演を4つ行うことができ，好評であった．

1999年度シンポジウム・年会での活動予定

・シンポジウムは行わない．
・年会ではポスターのみのセッションとする．
・セッション世話人予定者：能美洋介・坂本正徳・Venkatesh Raghavan

地質学会1999年年会に対する要望

・招待発表の枠の設置．
・招待講演者への講演依頼状の作成．
・会場における伝言サービスの機能に変わる電子メールサービスの提供．
・LAN（インターネットを含む）の設備の用意．

（情報部会行事担当　坂本正徳）

☆東北支部

総会，火山・地震学術シンポジウム［岩手山の火山活動と防災］岩手ネットワークシステム「地盤と防災研究会」と共催

日　時：12月5日　10時～
会　場：岩手大学工学部11番階段教室
内　容：日本地質学会東北支部

1. 10時～11時　岩手山の火山形成史　土井宣夫
2. 11時～11時30分
   1998年9月3日岩手県内陸北部の地震に伴う地震断層について
   越谷　信・篠崎地震断層調査グループ
3. 11時30分～12時　東北支部総会
   昼食

地盤と防災研究会・日本地質学会東北支部共催

1. 13時30分～13時35分　あいさつ
2. 13時35分～13時55分
   岩手県におけるこれまでの火山防災対策　斎藤徳美
3. 13時55分～14時30分
   岩手山の火山活動の現状　浜口博之
   質疑
4. 14時30分～15時20分
   地元関連企業などのよる火山観測　各7～8分程度
   休憩
5. 15時30分～16時20分
   岩手山火山防災マップの内容　説明15分　土井宣夫
   質疑　35分
6. 16時20分～17時45分
   今後の地元としての防災対策の在り方
   ビデオ「火山との共生」　22分
   提言と自由討論

交流会：18時00分～20時30分　工学部学生食堂　会費3,000円を予定

緊急

アンケートに答えて下さい（12月10日まで）

若手研究者懇談会で主要な議題にもなったとおり，院生会費の値上げは現実問題となってきました．メーリングリスト上で会費に関するアンケートは地質学会の諸事情を全く伝えることなしに実施し，さらにその結果を評議員会の議事録に載せてしまったことに関して，評議員の一部の反感を買ってしまうことになりました．学会の諸事情を踏まえたうえでもう一度アンケートを取り直すことが必要と思われます．院生メーリングリスト上ですでに返事を頂いた方，ご協力ありがとうございました．私の基本方針は会費の値上げを是が非でも阻止しようと思っております．解決策は地質学会の財政面を含む骨格の抜本的改革（法人化），学会にもっとも加入する数の多い階層である院生会員を会費の割安感から増やすこと（多分＋100人）によって学会の収入の採算があうことを主張していくつもりです．以下に背景を説明しますので参考にして頂ければ幸いです．

（芳野　極）

現在地質学会の財政状況は大変苦しい状態にあり，毎年内部留保を食いつぶしている状況にあります．執行委員会では，この赤字経営を黒字に転じるためには会費の値上げを止むを得ないとして，来年度分より一律2,000円の会費値上げを計画しています．我々院生評議員としては，「学会の台所事情の苦しいのは判るが，院生に年1万円の会費負担は高い」との見解から，院生会費値上げに反対の立場をとっています．しかしながら，我々の独断ではなく，院生会員の大多数の意見であることを表明しなくては委員会を納得させることはできません．というわけで，これに対する皆さんのご意見をお聞かせください．もちろん会費の値上げがうれしい人はないでしょうが，感情的に反対するのではなく，まず学会の財政状況を理解していただいて，その上での意見をお聞きしたいと思います．

（真砂英樹）

地質学会の財政状況

地質学会の予算運用は以下の原則にのっとっています．

1. 学会の基本的活動は会費収入によってまかなう．
2. 特定の会員が利益を受ける行事・企画（学術大会・シンポジウムなど）はその受益者が負担する．
3. 各専門部会・研究委員会の運営は独立採算制とする．

つまり会費でまかなわなければいけないのは1だけです．1の「基本的活動」には地質学雑誌・ニュース誌の発行や事務局の運営などが含まれ，その必要経費は年間7,358万円です．ここから文部省助成金（292万円）や雑誌売り上げ（550万円）などの会費外収入1,282万円を引いた残りの6,076万円を実際に会費によってまかなわなければいけません．現在会員数は賛助会員55名，名誉会員56名，正会員4,608名，院生会員596名，学生会員51名の計5366名で，正会員に換算すると5459名となります．よって会員1人当たりの必要経費負担額は6,076万円÷5,459人=11,130円　となります．さらに，現在の会費納入率が95％程度なので，実際は1人当たり11,715円の負担になります．

当然学会の方でも経費削減のために，神田にある現在の事務所をもっと安いビルに移すこと，および雑誌印刷費の低コスト化（紙質を落とすなど）を考えています．が，それだけではとても対応しきれず，やはり会費の値上げはやむを得ないとの結論に達したわけです．

以上のような事情を考慮した上で，以下のアンケートにお答えください．

学部生・修士課程・博士課程・研究生・その他（　　）
専門分野（　　）

Q1 あなたは日本地質学会に入っていますか？

はい　　いいえ

Q2 1ではいと答えた方におききします．会費の値上げについてどう思いますか？

学会の財政状況を考えると2,000円の値上げはやむを得ない．(10,000円)
値上げは仕方ないが，正会員と院生会員の値上げ額に差をつけてほしい．
具体的に（　　）
値上げには反対である．(8,000円)
その他（　　）

Q3 1でいいえと答えた方におききします．その理由は何ですか？（複数回答可）

特に入る必要性を感じないから．
会費が高いから．
周りに入っている人がいないから．
その他（　　）

Q4 正会員12,000円，院生会員8,000円の場合，割安感を感じますか？

はい　　いいえ

Q5 仮に会費が値上げされた場合，どのようなサービスがあれば値上げに見合うと考えますか？

・論文誌（地質学雑誌）の内容の充実．
・ニュース誌の内容の充実．
　どのような記事を特に望みますか？
　議事報告，解説，博物館等の紹介，書評，研究室紹介，海外学会・シンポジウム報告，技術的情報（論文の書き方，等），
　その他（　　）
・学会・シンポジウム等の充実．
・一般向け普及活動の活性化．
・出版物（地質学論集など）の充実．
・各種表彰・奨励金制度等の充実．
・その他（　　）

地質学会若手研究者メーリングリスト(mlys@higo.gs.niigata-u.ac.jp)は，このような院生・若手研究者に関わる問題を自由かつ活発に議論できる場です．まだ加入しておられない方は，ぜひこの機会にご加入ください．

アンケートの返事は〒113-0033　東京都文京区本郷7-3-1　東京大学理学系研究科地質学教室　芳野極宛に郵送するか，e-mailでアンケートの答えをyoshino@geol.s.u-tokyo.ac.jpに送って下さい．

ご協力お願いいたします．

研究室紹介　No. 4

大阪市立大学理学研究科地球史研究室

特色・概要：大阪市立大学理学部棟の1階と2階にある地球史研究室は，現在，教員3名，特別研究員1名，後期博士課程4名．前期博士課程6名，卒論生5名から構成されています．都市型総合大学としての伝統的な自由な学風のもと，個人個人が独自のテーマと問題意識をもって意欲的に研究に取り組んでいます．隔週で催されるセミナーはもとより，常日頃から刺激的で熱気に満ちた議論がおこなわれ，朝早くから夜遅くまで研究室の灯が消えることはありません．野外調査を重視し，地層や化石・岩石に残されている様々な記録を媒体として研究が進められています．興味を抱けば国内はもとより国外にも調査に出かけ，様々なアイデアを検証すべく，そしてフロンティアを目指して研究がなされています．最近では，オーストラリア（織田・江﨑），インド（林・中条・前島），中国（桑原・江﨑・八尾）へ野外調査に行きました．また，得られた成果を着実に論文として公表するという雰囲気にも満ちています．学会発表も積極的におこない，海外まで発表しに行く人もいます．このように，若い人には研究を進めやすい環境が整っています．卒業研究で研究活動の第一歩を踏み出した学部学生の多くは，研究をさらに進めるために大学院に進学しています．

研究内容

現在，地球史研究室のメンバーが夢中になっているものとしては，生物礁や化石刺胞動物から復元される環境変遷史，砕屑物質の堆積作用や堆積盆の発達史，放散虫という年代決定に強い武器を用いた東アジアの中・古生代地質構造発達史，遠洋性堆積物という連続記録媒体を用いた中・古生代海洋環境の変遷史，の解明などが挙げられます．従来の形式にとらわれない独自のアイデアを活かした独創的な研究を目指しています．

研究テーマ

現在，地球史研究室のメンバーによって，以下の具体的なテーマで研究が進められています．

八尾　昭（教授）中・古生代地球史，放散虫類の古生物科学
前島　渉（助教授）堆積盆解析，砕屑物質の堆積作用
江﨑洋一（講師）中・古生代の地球変遷史，化石刺胞動物の系統発生
桑原希世子（特別研究員）ペルム紀放散化石虫およびペルム紀/三畳紀境界
中条武司（D3）浅海成およびデルタ成堆積物の堆積学的研究
梅田真樹（D3）日本列島のシルル～デボン系の層序とテクトニクス
道前香緒里（D3）東アジアの中・古生代地帯発達史の地球化学的検討
干　浩　（D3）南中国の上部古生界の放散虫化石層序
谷口雅章（M2）美濃帯の中生界層状チャートにおける放散虫の形態変化
柏木健司（M2）紀伊半島における，黒瀬川帯と秩父帯の地質関係
織田聖子（M2）オルドビス紀サンゴの系統的進化
土居寿子（M1）古生代サンゴの形態変化
西原ちさと（M1）中生代放散虫の群集解析による海洋環境の復元
林美明子（M1）中新統国見累層の堆積学的研究，ゴンドワナ堆積盆の研究
足立奈津子（B4）デボン系福地層群の生物礁
大川和博（B4）中新統国見累層の扇状地堆積作用
大槻芳泰（B4）ペルム紀におけるフズリナの進化および変遷
原田嘉彦（B4）秋吉帯の石炭紀前期の生物礁
安原有美（B4）古生代サンゴ骨格に残された相互関係性

以上のテーマはもとより地球の歴史に興味のある若い方は，ぜひ地球史研究室に遊びに来て下さい．お待ちしています．研究の進め方にはまだまだ発展途上の部分が多くありますが，今後ともよろしくお願い致します．

セミナー場所・日時；杉本キャンパス理学部棟2階第2ゼミ室にて，隔週木曜日の15時より2～3時間ほどおこなわれています．詳しくはホームページ（http://www.sci.osaka-cu.ac.jp/~geos/）をご覧下さい．
住所；〒558-8585大阪市住吉区杉本3-3-138

……

研究室紹介や海外学会巡検報告についても常時投稿をお待ちしております．院生コーナーの編集は以下の3人で行っておりますので投稿は以下のメールアドレス宛てe-mailで頂ければ幸いです．

yoshino@geol.s.u-tokyo.ac.jp　芳野　極（東大）
696g5059@mn.waseda.ac.jp　澤口　隆（早大）
massago@geo.titech.ac.jp　真砂英樹（東工大）

若手研究者メーリングリストへの参加方法
smlys@higo.gs.niigata-u.ac.jpあてに，subjectは空欄で
SUBSCRIBE mlys Your Name
（例：SUBSCRIBE mlys Takuji Hamamoto）
のメールを送ってください．登録が完了されるとメッセージが返送されます．

学　会　記　事

1998年度臨時評議員会 議事抄録

1998年10月19日
日本地質学会　評議員会議長　　小泉　格

日　時：1998年9月24日(木)14：00～17：30
場　所：信州大学理学部会議室
出席者：小松正幸会長，坂　幸恭・徳岡隆夫副会長，小泉　格評議員会議長
足立勝治，足立久男，赤羽貞幸，赤羽久忠，秋葉文雄，天野一男，飯川健勝（代　堀川），磯﨑行雄，板谷徹丸，上砂正一，永広昌之，川辺孝幸，木村　学，菊地隆男，久保和也，公文富士夫，熊井久雄（代　八尾），小井土由光，小出良幸，小林和宏，佐々木和彦，佐瀬和義，斎藤靖二（代　天野），酒井治孝，柴　正博，柴﨑直明（代　足立久），嶋本利彦，田結庄良昭，田崎和江，高須　晃，高橋正樹，高安克己，滝田良基，巽好幸（代　木村），徳橋秀一，鳥海光弘，那須孝悌，新妻信明，楡井久，野村　哲，堀川秀夫，真砂英樹，丸山茂徳，別所孝範，八尾　昭，吉田武義，芳野　極　各評議員　水野篤行（事務局）

冒頭に，小泉　格評議員会議長より第2回定例評議員議事抄録が1998年9月1日付けで承認されたとの報告があった．

報告事項

1.　組織運営検討委員会の検討状況について

徳岡隆夫委員長より配布資料に基づいて，第2回定例評議員会以降の検討経過と，下記項目に関する検討内容の説明があり，さらに松本大会においてその内容に関するポスター展示を行うとの報告があった．

(1)　地質学雑誌の編集体制
(2)　支部のあり方
(3)　研究委員会のあり方
(4)　総会開催の時期
(5)　会長・副会長の被選挙権者
(6)　会長・副会長の評議員会での位置付け
(7)　その他学会の組織運営に関する課題の抽出
　・地質基準に関する恒常的組織の設置について　・ニュース誌の位置付けと地質学会のあり方　・将来の支部体制

討論のなかで，ニュース誌のみを講読する会員制度があってもよいのではないかと述べられたことに対し，財政問題との関係から慎重に扱うべきであるとの意見が出された．（報告全文がニュース誌1–10に掲載されるので報告の詳細な記述は省略する）

2.　事業計画委員会の検討状況について

坂　幸恭委員長より，第2回定例評議員会以降の活動の内容が次のように報告された．

前回の評議員会以降，3回の委員会を行った．Q＆Aに代わる広報のスタイルを検討し，また，現在法人化を決定している他学会，あるいは法人化を検討中の他学会に関する情報の収集をさらに行うことにした．さらに，組織運営検討委員会・財政問題検討委員会の審議内容を勘案しながらすでにできている本学会の定款案を改訂する作業にとりかかることとした．松本大会のポスターセッションにおいては，法人に関する基本的事項（社団法人と任意団体の相違等）をとりあげて広報する．

3.　執行委員会報告

足立勝治執行委員長より第7回執行委員会（9月14日）と第8回執行委員会（9月24日）における，主な報告・審議事項の概要が報告された．

第7回執行委員会報告においては，各常置委員会報告の主なもののほか，学校科目「地学」関連学会連絡協議会・普及教育実行委員会・科研費検討小委員会報告・第一次地質基準策定委員会・各賞問題検討委員会・財政問題検討委員会・地層名命名規約策定委員会の報告が紹介された．

それらの中で普及教育実行委員会報告に関しては，1教科書出版社から平成14年度の教科書改訂に向けての「中学校理科第2分野の教師用指導書（地方版）」の改訂・編集を地質学会として検討して欲しいとの要望が学校教育WGに対してあり，学校教育WG側の編集方針が受け入れられる限り申し入れに応ずるという同WGの結論が同社により受け入れられたので，今後作成に向けて取り組みたいとの意向が執行委員会に出され，執行委員会として了承したとの報告があった．評議員会としてもこれを了承した．また，「初等中等教育に関する専門部会の設立に向けてさらに検討を進めたいとの同WGの要望を執行委員会として了承したとの報告があった．

ニュース誌については，当初の見込みよりかなりページ数と印刷費が超過しつつあり，今後のニュース誌のあり方（財政問題も視野に収めながら）について評議員および会員の活発な議論・検討をお願いしたいと述べられた．

第8回執行委員会報告においては，第107年総会（2000年春）の開催地について筑波大学に依頼していたところ，承諾の回答が寄せられたとの報告があった．

4.　その他の報告

足立勝治執行委員長より下記の事項に関する第7回執行委員会での決定内容の報告があり，それぞれ了承された．

(1)　財政問題検討委員会から提案のあった事務局移転問題に関する検討を本年12月の第3回定例評議員会までに早急に進めるために事務局移転問題検討ワーキンググループを執行委員会に設置し，足立執行委員長，久保和也第二庶務委員長，佐々木和彦会計委員長，水野篤行事務局長の4名で構成することを了承して欲しいとの報告があり，質疑応答の上異議なく了承された．
(2)「日本地質図体系，全8巻（地質調査所監修，朝倉書店刊）」の刊行に対して，大森昌衛・黒田吉益両名誉会員から日本地質学会としての何らかの顕彰を検討して欲しいとの要望が出され，この件を各賞問題検討委員会に検討を要請することとした．
(3)　小松正幸会長から，各賞のなかで国際賞等の公募による賞の応募に関して内規の整備が必要であり，この問題について執行委員会で検討して欲しいとの申し入れがあり，この件を各賞問題検討委員会で検討してもらうことを依頼することとした．
(4)　選挙委員会から「選挙委員の原稿の推薦方式が現状に不適合であるので検討して欲しい」との要望があり，現在組織運営検討委員会において支部の問題の検討が別途進められているので，この件を併せて検討してもらうよう要請することとした．

議　題

1.　日本地質学会の財政改善計画について

上砂正一財政問題検討委員長より配布資料に基づいて，第2回定例評議員会以降の同委員会の検討状況及び内容が報告された（報告の全文はニュース誌1–10に掲載につき省略）後，会費を学会の基本的活動のみに充てる，他の経費は受益者負担あるいは独立採算により別途徴収するとの原則に立った，次の4点が財政再建のための重要な方策として，予備的に提案された．(1)会費の値上げ（2,000円以上），(2)経費削減のための事務局移転の検討，(3)ニュース誌の印刷経費削減，(4)財政上の視点からの社団法人化の必要性と，その実現に向けての検討の推進．

以上の提案について活発な議論が行われ，その内容を第3回定例評議員会における中間答申に向けての検討委員会の検討のための基礎的資料とすることとした．出された主な意見は次の通りである．

・会費の値上げについて：(1) 現在の出版物の規模で12,000円は安すぎるが，会費値上

げについては値上げした後の財政のはっきりした見通しのもとに行うべきである．(2) 院生会員にとって値上げ，大会参加費の別途徴収は厳しい．入会しなくなるのではないか．(3) 値上げ以外に収益事業を図るべきである．(4) 現状では職員の退職金の支払いができない．少なくとも2,000円程度の値上げは必要である．(5) 値上げ問題は雑誌等の発行や事務局の問題等を含めた学会全体の活動に関わる問題であり，総合的に検討していく必要がある．(6) 社会人院生については公務員あるいは会社員の身分の場合，正会員と同じ扱いでよい．これに対し院生側からは，社会人院生が院生会費を払うことに不公平感を持つ院生会員は少ないとの報告が出された．

・事務局の移転問題について：移転については現在の交通・通信状況も考慮に入れて，WGで総合的に検討して欲しい．

・ニュース誌について：(1) 紙質（表紙を含めて）を落とすことにより，年間約100万円の節減が可能であろう．また，内容については解説記事を増やした方がよい（ニュース誌編集委員長）．(2) ニュース誌は，会員に対するサービスをどのように行うかという観点から考えることが必要．専門部会あるいは会員間の連絡に有用である．コスト削減の努力を行うとともにさらに充実すべきである．

・法人化の問題について：(1) 地質基準策定とその社会的影響力のためには法人化がぜひ必要である．(2) 法人としての具体的事業としては，出版活動，講習会開催，委託研究などが考えられる．(3) 今後どのように法人化に向けて評議員会として考えていくか検討すべきである．

・全体的な問題について：財政改革を検討の場合，評議員会として長期的視野で，また包括的な課題のもとに考えていくことが必要である．

2. 藤田至則名誉会員からの評議員会宛の要望書（1998年9月21日付け）について

小泉　格評議員会議長より標記の要望書「1998年度第2回評議員会の私宛の回答に対する要望」が提出されたことが紹介された．評議員から次の発言があった．藤田会員の指摘は，字づらのことを問題にしているのではなく，会則にないことをあちこちで実行に移していることにある．会員は会則をよりどころに入会しているのだから，会則に合わないことが行われれば，不安になって退会する人が現れる恐れがある．徳岡さんが委員長の組織運営検討委員会報告の中の「⑤会長・副会長の被選挙権者を正会員とすること」で，その理由として「(1)規則を現実に合わせるのがよい」とあるが，これは，ちょうど，憲法の九条を無視しておいて，現状に合わないから憲法を改正する，というのと同じである．藤田さんはこういうことをしないで欲しい，といっているのだと思う．

最後に，小泉評議員会議長から，要望書に対して回答するかどうかを含めて取扱いを一任させて欲しいと述べられ，これを了承した．

執行委員会だより

1998年度第9回執行委員会

1998年10月19日（月）14：00～17：00に日本地質学会事務局において行われました．出席者は足立勝治執行委員長・天野一男・佐々木和彦・高橋正樹・水野篤行事務局長でした．主な報告・審議事項は以下のとおりです．）

1. 第36回理工学における同位元素研究発表会（1999年度）に対して，運営委員として角井朝昭氏を推薦し，共済分担金3,000円を出すこととした．
2. 名誉会員有資格者名簿を内規に従い準備した．支部推薦候補者・執行委員会候補者については全体を整理した上で次回の執行委員会に諮ることとした．
3. ニュース誌で公募した第106年総会・シンポジウム（1999年3月26・27日，早稲田大学）に5件の申し込みがあった．
4. 地質科学関係学協会連合の可能性について検討した．これについては，地質科学関係学協会連合に関する検討委員会を作ることが必要との結論にいたった．委員会の構成等について次回執行委員会に諮った後，12月の評議員会に委員会の設置を提案することとなった．

1998年度第3回定例評議員会のお知らせ

標記評議員会を下記のように，12月19日（土）に開催いたします．傍聴希望の方は12月11日（金）17：00までに，執行委員会宛，氏名・連絡先を記入した申請書をご提出ください．

1998年度第3回定例評議員会

日　時：1998年12月19日（土）12：30～18：00

場　所：北とぴあ802会議室

The Island Arcだより

今年のVol.7は，Issue 1/2, Issue 3とかなり大部でそれも特集号が主体となりましたが，Issue 4は，通常の個別論文（4編）とVol. 7全体の掲載論文リストから構成されます．なお，著者校正の段階で2週間程度年間編集スケジュールから遅れていますが，本年12月中には発送される予定です．しかし，例年とおり年末の混雑時期に重なりますので，国内の購読者のお手元に届くのは来年1月半ばとなる可能性があります．Vol. 7, Issue 4の構成は次のとおりです．

Volume 7, Issue 4 (December)

Research Articles

Phase relations and P–T conditions of the Ryoke pelitic and psammitic metamorphic rocks in the Ina district, Central Japan
T. Hokada

Paleoseismic events and the 1596 Keicho–Fushimi large earthquake produced by a slip on the Gosukebashi fault at the eastern Rokko Mountains, Japan
A. Lin, T. Maruyama, and T. Miyata

Upper Silurian–Middle Devonian radiolarian zones of the Yokokurayama and Konomori areas in the Kurosegawa Belt, Southwest Japan
M. Umeda

The 1995 Northern Niigata Earthquake with special attention to a geopressured hydrothermal system
H. Xu, Y. Oki, and T. Ito

Volume 7 Index

10月6日（火）午後，東京お茶の水において，来日中のBlackwell Science社Melbourne支社のManaging Editorであるの会合では，現在の論文の受理状況や来年（Vol. 8）のIssue 1の構成，特集号の企画進捗状況などについて日本側から説明がなされました．一方，Blackwell Science社側からは，印刷上の技術的な問題，特に白黒濃淡（グレイ階調）で出力した原図は，印刷会社でスキャナー入力する際やタイプセット後の紙面上で識別が困難な場合があるという問題について説明があり，この対策について議論をかわしました．基本的にはカラー図面でないかぎり，凡例は模様（パターン）にする必要があるという点で一致しました．また，投稿原稿の付図について，印刷時の縮尺に耐えない小さな文字や似通った線種がタイプセットの段階で問題になることが多く，原図の判読性をもとに縮尺が規制されてしまって，予想以上に拡大されてページが圧迫されることが指摘され，今後原稿査読時に付図の内容だけでなく印刷時の縮尺についてのチェックも厳しく行うことにしました．白黒階調出力された原図のスキャナー読み込みにおけるトラブルを避けるための図面の作り方についても，何かいい方策がないか，Blackwell Science社の方で検討してもらうことになりました．なお，来年（Vol. 8）は従来通り年4冊の発行で臨むことが確認されました．

なお，論文の投稿や雑誌の編集上のことでお聞きになりたいときは編集委員長まで，その他のいろいろな問い合わせ・ご意見・苦情等につきましては，気軽に編集事務局長までお知らせください．出張等で長期不在の場合もありますので，後者の場合は，宛先を連名でお送りくだされば幸いです．

The Island Arc編集委員長
小川勇二郎（筑波大学，電話 0298–53–4307, Fax : 51–9764,
E–mail : yogawa@arsia.geo.tsukuba.ac.jp）
巽　好幸（京都大学，電話 0977–22–0713, Fax : 22–0965,
E–mail : tatsumi@bep.vgs.kyoto-u.ac.jp）

The Island Arc編集事務局長
徳橋秀一（地質調査所，電話 0298–54–3676, Fax : 54–3666,
E–mail : toku@gsj.go.jp）
渡部芳夫（地質調査所，電話 0298–54–3677, Fax : 54–3666,
E–mail : nabe@gsj.go.jp）

CALENDAR

1998, 11〜

地球科学分野に関係する研究会，学会，国際会議などの開催日，会合名，開催学会，開催場所をご案内いたします．会員の皆さまの情報をお待ちしています．
☆印は，日本地質学会主催行事．

11月 November

☆日本地質学会環境地質研究委員会第8回環境地質学シンポジウム
28日（土）〜29日（日） 場所：大阪市立大学法学部棟

○「都市地震防災地盤図」に関するシンポジウム―深部地盤構造の重要性―
30日（月） 主催：日本応用地質学会　場所：中央大学駿河台記念館281号

○UNESCO-IUGS共同研究事業・IGCP（国際地質対比計画）シンポジウム
「文化遺産と自然災害」
30日（月）〜12月1日（火） 場所：カナダ大使館　連絡先および申込先：斜面災害研究推進会議事務局　〒611-0011 宇治市五ヶ庄 京都大学防災研究所　地盤災害研究部門気付 電話 0774-38-4113，Fax 0774-38-4300

12月 December

☆東北支部　総会，火山・地震学術シンポジウム［岩手山の火山活動と防災］岩手ネットワークシステム「地盤と防災研究会」と共催
5日（土）10時〜 会場：岩手大学工学部11番階段教室（詳細は本誌）

☆関東支部巡検　第4回シーケンス層序学巡検―古東京湾の堆積物をみる―および町民公開講座―霞ヶ浦・北浦周辺の自然環境―
5日（土）〜6日（日）

○教科「理科」関連学会協議会　第3回シンポジウム「これからの理科教育に求めるもの」
12日（土） 場所：日本化学会（東京都千代田区）　お問い合わせ：間々田和彦（筑波大学附属盲学校）まで〒112-8684 東京都文京区目白台3-27-6筑波大学附属盲学校内　電話03-3943-5421，Fax：03-3943-5410

1月 January 1999

○千葉大学国際シンポジウム「環境と地下水に関する国際シンポジウム」
12日（火）〜14日（木） 会場：千葉大学けやき会館　問い合わせ先：(事務局）千葉大学理学部地球科学科　佐倉保夫　〒263-8522 千葉市稲毛区弥生町1-33　電話 043-290-2844　Fax 043-290-2874　E-mail：ysakura@earth.s.chiba-u.ac.jp

○第2回国際土壌・地下水環境ワークショップ IWGER'99
13日（水）制度編　14日（木）技術編
場所：パシフィコ横浜　3階大会議室　主催：第1日　環境庁　神奈川県（制度編）第2日　（社）土壌環境センター（技術編）（「環境事業団地球環境基金」助成事業）　申し込み方法：Faxまたは郵送にて下記事務局宛お申し込み下さい．参加登録票を発送いたします　事務局：社団法人土壌環境センター 担当：服部，青木　〒108-0014 東京都港区芝4-4-5　三田KMビル5F 電話 03-3452-2593　Fax 03-3452-2832　申し込み締め切り：12月15日（火）（ただし，先着順で定員600人．）

○日本古生物学会1999年年会
29日（金）〜31日（日） 場所：東北大学（横浜国立大学間嶋隆一　電話045-33-9334）

3月 March

○The 1999 SME Annual Meeting &Exhibit
1〜3 Colorado Convention Center Denver, Colorado Contact: Meetings Dept., SME P.O. Box625002, Littleton, CO80162-5002（800）763-3132,（303）973-9550, Fax：（303）979-3461,E-mail：meetings@smenet.org,www.smenet.org

○国際ワークショップ「社会実験地での循環複合体のシステム構築と環境調和技術の開発」
8日（月）13：00-17：00〜9日（火）9：30-18：10 場所：大阪大学コンベンションセンター（無料）　主催：科学技術振興事業団・戦略的基礎研究推進事業・大阪大学大学院工学研究科

☆日本地質学会第106年総会
26日（金）〜27日（土） 場所：早稲田大学

5月 May

○ Toward a Science of Consciousness―Fundamental Approaches―Tokyo '99（脳と意識に関するTokyo '99国際会議）
25日（火）〜28日（金） 場所：国連大学本部（東京都渋谷区神宮前5丁目）　連絡先：〒700-8516 岡山市伊福町2-16-9　ノートルダム清心女子大学　情報理学研究所内 Tokyo '99組織委員会事務局　電話 086-255-5636　Fax 086-255-5090　E-mail：tokyo99@zoushoku.narc.affrc.go.jp　ホームページ　http：//www.ias.unu.edu/activities/tokyo99.htm

6月 June

○地球惑星科学関連学会1999年度合同大会
8日（火）〜11日（金） 場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

9月 September

○第8回化石クニダリア海綿国際会議
12日〜16日 会場：仙台市の仙台国際センター　連絡先並びに2nd Circular申し込み先：〒980-8578 仙台市青葉区荒巻　東北大学総合学術博物館　第8回化石クニダリア海綿国際会議組織委員会　森　啓　電話 022-217-6769　Fax022-217-6631　E-mail：mori@dges.tohoku.ac.jp

10月 October

☆日本地質学会第106年年会
9日（土）〜11日（月） 場所：名古屋大学

○第7回太平洋地域新第三系国際会議
3日（日）〜6日（水） The 7th International Congress on Pacific Neogene Stratigraphy 場所：国立メキシコ大学　主催：RCPNS（太平洋地域新第三系層序委員会）　連絡先：Prof. A. Molina-Cruz, Organizing Committee of VII-RCPNS, Inst. Cien. Mar. Lim., UNAM, Ap. Post. 70-305, Ciudad Universitaria, Mexico D.F. 04510　Fax：52-5-6160748　国内連絡先：〒422-8035　静岡市宮竹1-9-24　土研究事務所　土　隆一　電話 054-238-3240 Fax 054-238-3241 e-mail：vyz01052@nifty-serve.or.jp　会議前後にExcursionを計画，First Circularは10月に発送される予定．

出 版 物 在 庫 案 内

ご希望の方は代金を添えて本会事務局宛お申込みください．なお，2冊以上のお申込みにつきましては送料をお問合せください．現金書留または郵便振替　00140-8-28067

割引頒価：21号～39号　院生・学生4割引，それ以外の会員2割引，40号以降院生・学生のみ2割引

地 質 学 論 集

第 21 号　続・日本列島の基盤．加納　博ほか編，331 pp., 1982年4月刊，会員頒価2,400円，〒380円
第 22 号　琉球列島の地史．木崎甲子郎ほか編，165 pp., 1983年4月刊，会員頒価2,100円，〒310円
第 26 号　白亜系の国際対比―現状と問題．平野弘道編，172 pp., 1985年3月刊，会員頒価2,000円，〒310円
第 30 号　日本の第四紀層の層序区分とその国際対比．市原　実ほか編，221 pp., 1988年4月刊，会員頒価2,000円，〒340円
第 31 号　関東地方の基盤と変動．福田　理ほか編，138 pp., 1988年6月刊，会員頒価1,600円，〒310円
第 33 号　西南日本内帯高圧変成帯とテクトニクス．西村祐二郎ほか編，357 pp., 1989年4月刊，会員頒価3,000円，〒380円
第 34 号　堆積盆地と褶曲構造―形成機構とその実験的研究―．三梨　昂ほか編，209 pp., 1990年3月刊，会員頒価2,500円，〒340円
第 37 号　古日本海東縁の新第三系―層序・古地理・古環境．小林巌雄ほか編，326 pp., 1992年3月刊，会員頒価3,000円，〒340円
第 38 号　変動帯における砕屑岩類の組成と起源―日本列島を例として―．君波和雄ほか編，401 pp., 1992年3月刊，会員頒価3,500円，〒380円
第 39 号　続湖沼の成因と環境・地質．徳岡隆夫ほか編，189 pp., 1993年3月刊，会員頒価2,200円，〒310円
第 40 号　中央構造線のネオテクトニクス―その意義と問題点―．岡田篤正ほか編，250 pp., 1992年12月刊，会員頒価3,200円，〒340円
第 41 号　中部九州後期新生代の地溝．長谷義隆ほか編，192 pp., 1993年6月刊，会員頒価3,100円，〒310円
第 42 号　西南日本の地殻形成と改変．小松正幸ほか編，357 pp., 1993年4月刊，会員頒価3,100円，〒380円
第 43 号　浅部マグマ溜りとその周辺現象の地球科学．村岡洋文ほか編，177 pp., 1994年4月刊，会員頒価2,000円，〒340円
第 44 号　島弧火山岩の時空変遷．周藤賢治ほか編，335 pp., 1995年11月刊，会員頒価2,800円，〒380円
第 45 号　シーケンス層序学―新しい地層観を目指して．斎藤文紀ほか編，249 pp., 1995年8月刊，会員頒価2,500円，〒340円
第 46 号　火山活動のモデル化．佐藤博明ほか編，162 pp., 1996年9月刊，会員頒価1,900円，〒310円
第 47 号　日高地殻―マントル系のマグマ活動．荒井章司ほか編，323 pp., 1997年4月刊，会員頒価3,000円，〒380円
第 48 号　Cretaceous Environmental Change in East and South Asia (IGCP 350) Contributions from Japan―　岡田博有ほか編，188 pp.，1997年6月刊，会員頒価2,100円，〒340円
第 49 号　21世紀を担う地質学．新妻信明ほか編，232 pp.，1998年3月刊，会員頒価2,500円，〒340円
第 50 号　構造地質　特別号―21世紀の構造地質学にむけて―．狩野謙一ほか編，263 pp.，1998年7月刊，会員頒価2,500円，〒380円
第 51 号　地震と地盤災害―1995年兵庫県南部地震の教訓―．岡田博有ほか編，162 pp.，1998年3月刊，会員頒価3,000円，〒340円

討論会講演要旨（1979年4月刊，東京四谷）会員頒価700円，〒340円
第92年学術大会講演要旨（1985年3月刊，山口）会員頒価3,200円，〒500円
第96年学術大会講演要旨（1989年5月刊，茨城）会員頒価3,500円，〒500円
第101年総会・討論会講演要旨（1994年3月刊，東京）会員頒価1,500円，〒400円
第103年学術大会講演要旨（1996年4月刊，仙台）会員頒価3,500円，〒500円
日本の地質学100年（100周年記念誌，1993年3月刊）頒価8,000円，〒600円
第104年総会講演要旨（1997年4月刊，東京）会員頒価700円，〒300円
第105年年会講演要旨（1998年9月刊，松本）会員頒価3,500円，〒500円

地質学論集の割引について

地質学論集の割引については以下のとおりです，大いにご利用下さい．

No. 39以前の論集：院生・学生は4割引，正会員は2割引
No. 40以降　　：院生・学生のみ2割引

論集の割引は，とくに経済的な困難をかかえながらも，日夜研究をつづけている院生・学生諸氏への優遇を重点におきました．なお，院生・学正会員諸氏への優遇措置は，各号につき一人一冊と限らせていただきます．申込みの際，「院生」あるいは「学生」会員であることを明記下さい．

取扱い地質図一覧（委託販売）

1998/11/1 現在

100 万分の 1 日本地質図　第 3 版　4 枚組　¥6,000
　〃　　*CD-ROM　¥5,900
地球化学アトラス—北関東—　¥5,300
200 万分の 1 地質編集図
22　コンピュータ編集による日本地質図（付記付き）　¥2,200
23　日本の磁気図（付記付き）　¥2,400
特殊地質図
21-5　仙岩地域中心部地熱地質図 1：5 万（説付き）　¥3,700
30　札幌及び周辺部地盤地質図 1：3 万（説付き）　¥4,000
20　東京湾とその周辺の地質　¥5,900
31-2　秋田地熱資源図　¥4,800
50 万分の 1 地質図幅
3　旭川　¥2,000
50 万分の 1 活構造図
*8　東京（第 2 版）　¥3,100
2.5 万分の 1 地質構造図
7　阿寺断層系ストリップマップ　¥2,800
8　中央構造線活断層系（四国地域）ストリップマップ　¥4,300
9　中央構造線活断層系（近畿地域）ストリップマップ　¥2,300
10　柳ヶ瀬-養老断層系ストリップマップ　¥2,400
11　糸魚川-静岡構造線活断層系ストリップマップ　¥2,400
20 万分の 1 地質図幅
夕張岳　¥2,400，名寄　¥2,200，岩内　¥2,300，青森　¥2,200，八戸　¥2,200，相川及び長岡の一部　¥1,700，高田　¥2,600，宇都宮　¥2,600，八丈島　¥1,300，飯田（第 2 版）¥2,300，富山　¥2,300，岐阜　¥2,600，木本　¥1,300，高梁　¥2,400，徳島　¥2,000，宇和島　¥2,000，厳原　¥1,300，福岡　¥2,400，*鹿児島　¥2,400，*宮崎　¥2,500，唐津　¥2,100，奄美大島　¥1,800，久米島　¥1,800，*長野　¥2,900，*和歌山　¥2,500
日本地質図索引図　第 6 集（1985-1989）　¥6,700
地質図目録図（1995 年）　¥500
日本地質文献目録（GEOLIS）
1988 年　¥3,100，1989 年　¥3,500，1991 年　¥4,900
1992 年　¥5,500
海洋地質図
35　鳥取沖海底地質図 1：20 万（説付き）　¥3,800
36　鳥取沖表層堆積図 1：23 万（　〃　）　¥3,100
37　室戸沖表層堆積図 1：20 万（説付き）　¥2,700
38　経ケ岬沖表層堆積図 1：20 万（　〃　）　¥2,900
39　下北半島沖海底地質図 1：20 万（　〃　）　¥3,200
40　経ケ崎岬海底地質図 1：20 万（　〃　）　¥3,400
*47　粟島周辺海底地質図（説付き）　¥5,200
*48　秋田西方海底地質図（　〃　）　¥5,300
重力図
1　青森地域重力図（ブーゲー異常）第 2 刷 1：20 万　¥2,100
2　秋田地域重力図（ブーゲー異常）1：20 万　¥1,400
3　山形地域重力図（ブーゲー異常）1：20 万　¥1,400
7　北上地域重力図　¥2,300
* 8　渡島地域重力図　¥1,700
* 9　苫小牧　¥1,500
*10　札幌　¥1,700
火山地質図
浅間火山　1：5 万　¥1,700，*那須火山　¥2,100，青ヶ島火山および伊豆諸島南方海底火山地質図 1：1 万　¥2,500，雲仙火山地質図　¥1,100　*伊豆大島　¥1,700　*阿蘇（第 3 版）　¥1,100
地域地質研究報告　地質図 1：5 万及び説明書
糠内　¥2,800，松前　¥2,700，黒石　¥3,400，鳥海山及び吹浦　¥3,500，刈和野　¥2,400，登米　¥3,100，大須　¥2,400，若松　¥2,600，原町及び大甕　¥3,900，長岡　¥4,000，八海山　¥2,700，苗場山　¥2,700，出雲崎　¥3,200，浪江及び磐城富岡　¥3,300，高田東部　¥2,900，中野　¥2,500，寄居　¥3,000，清水　¥2,700，那古　¥1,800，上高地　¥3,500，谷汲　¥2,400，槍ヶ岳　¥2,900，金山　¥3,100，下呂　¥2,700，四ツ谷　¥2,500，福知山　¥3,200，篠山　¥2,900，園部　¥2,900，桑名　¥3,200，今市（島根県）　¥2,900，赤名　¥2,700，明石　¥2,400，和歌山及び尾崎　¥2,300，松江　¥3,300，広島　¥1,500，洲本　¥2,600，折尾　¥3,000，福岡　¥3,700，佐賀関　¥2,600，豊岡　¥2,400，犬飼　¥3,400，小値賀島及び肥前平島　¥2,400，三重町　¥3,200，佐伯　¥3,000，尾鈴山　¥3,500，神浦　¥2,800，末吉　¥3,100，湯湾　¥3,200，乗鞍岳　¥3,200，北条　¥4,000，津西部　¥4,100，広根　¥3,500，福江　¥2,600，二本松　¥2,900，恵比島　¥2,800，美濃　¥2,400．大阪西北部　¥2,400，大阪西南部　¥2,400，神戸　¥3,100，*須磨（2 刷）　¥2,400，岸和田　¥3,700，志津川　¥4,100，相馬中村　¥5,100，真壁　¥3,600，高遠　4,200，*上野　¥4,000，飯豊山　¥3,000，椎葉村　¥4,300，柿崎　¥3,300，*岩ヶ崎　¥4,300，*大分　¥3,800，*倉橋島及び桂島　¥2,900，*姫島　¥2,600，*宮原　¥4,500，*姉崎（2 刷）　¥3,400，*四日市（2 刷）　¥2,700，*石見大田・大浦　¥3,800，*大阪東南部　¥3,400，*京都東北部　¥3,700，*熊川　¥3,600，*熊田　¥3,300，*小倉　¥3,700，*玉庭　¥4,300，*名張　¥3,200，*横須賀　¥2,700，*秋田（2 刷）　¥1,800，*伊東（3 刷　説明書なし）　¥900

*会員には定価の 1 割引きで，代金後払いで注文をお受けいたします．なお，委託販売につき 5% の消費税をいただきます．ご注文は電話か Fax にて（なるべく Fax で），地質学会事務局へお申込み下さい．＊印のついたのは新刊および新扱いです
電話　03-3252-7242，Fax．03-5256-5676

日本地質学会　〒101-0044 東京都千代田区鍛冶町 1-10-4 丸石ビル4階　電話 03-3252-7242
Fax 03-5256-5676　E-mail : geosocjp@ra2.so-net.or.jp　ホームページ http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/gsj/